毎月十日廿日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治二十九年十二月十日發兌

第九拾壹號

口絵＝雪の日や

社説＝日課

史傳＝小野小町（其の字生）

マルチン、ルーテル　南柯堂

雲の罹（中）　三鷹子

見合　桐酒舎女史

電燈會社　紫嬌

勇しき孝子（三）　松ケ枝女史

群書解題＝方丈記

近濟紹介＝近刊書

家政＝數学のなぐさみ、天然痘の流行、内職案内等

社交一班＝新年流行品

雜錄＝深井仁子、小兒の世界

歌苑＝勇士、利根舟遊の歌

見よ四版

勝海舟伯題字　弘松宣枝著

阪本龍馬

肖像並に手翰石版刷り入

定價拾五錢
郵稅四錢

◎每日評　弘松宣枝氏の筆に成り例の民友社より發兌す龍馬はそれ土佐人の最も完全したる典型ならんが其辯舌の雄快は後藤象次郎に類して意志の堅剛これに過ぎ僅々十年に滿たざる公生涯には幾多の波瀾あり幾多の曲折あり悲を曰へば悲の極喜を曰へば喜の極を盡くし個個快絕壯絕の歷史なり本書はこれを叙する簡にして要を得たり

◎中央評　維新革命の當時に在つて西鄕木戶と名を均くせし坂本龍馬氏の傳記なり氏の傳記嚮きに坂崎氏の汗血千里駒ありと雖も其小說体の結撰雅致の故を以て多く婦幼の玩ぶに止まり他此偉人の爲に氣を吐く者少れに其事業性行漸く世人に忘れられんとするの時此著作を見る流麗有趣の筆能く當時の情勢と坂本氏の面目を描き得たり吾人は著者の勞を多とせずんばあらず

◎教育時論評　是れ明治維新の先導者、土佐の勤王家たる坂本龍馬の小傳なり。先づ土佐の勤王論か。山崎流の朱學によりて發育し、谷仁山によりて成長したるより說き起し、次に龍馬が少年時代靑年時代の摸様を、當時の時勢と共に並せ寫し、次に土州の志士武市半平太、吉村寅太郎の生涯を略叙し、一轉して勝海舟と龍馬との關係を說き、再轉して薩の聯合、伏見の遭難を寫し、夫より海援隊、小倉の役、汽舩の衝突、大政返上、最後、中岡愼太郎の人物を紹介し、遂に家庭に於ける龍馬、及其人物に至りて卷を終る。而して著者は、實に龍馬の近親に當れりと云ふ。讀者をして龍馬の一斑を知らしむるには遺憾なかるべし。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

社界叢書
第六卷

學問の應用

定價十錢
郵稅二錢

章を分つ五曰く(第一)學問(第二)學問の種類(第三)學問の撰擇(第四)學問の方法(第五)學問の應用…說き來つて懇切文章平易を旨とす今や我多望なる幾萬の靑年は彼等が學びたる學藝技術の供給に窮しつゝ無能無藝なるが如く遑々たり此書以て指南車たるを得ん

•••••經濟雜誌評　學問貴しと雖も其の應用を誤るときは國家の爲め、自己の爲め、害あるも益なし、此書は丁寧に學問の應用法を說明せり、學生及び學に就かんとする者の爲めに有益の書なり

••••都新聞評　一小冊子なり固より詳密の意見を示したるものにあらずと雖ども此書に就て死學者たるを免かるるの道を講ずるは之を迂なりとは云ふべからず

••••東京朝日評　社外叢書第六卷なり第一章より第五章に至り即ち學問の種類、撰擇、方法、應用に就て深切に論述せしなり(京橋區日吉町民友社發行)

•••••早稻田文學評　社會叢書の第六、學問の種類、撰擇、方法、應用等を說きたり、學問の撰擇を說いて、天性、嗜好、時勢の三適を擧げたるなどは善し、されど其の關係を明めざれば往々にして蹉躓することあり、「天性と嗜好と反するが如き場合、最も少年の踏み迷ひ易き所なり」

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

今世人物評傳叢書 第一冊

三版 山縣有朋 附渡邊國武 岡本柳之助

定價 十五錢 郵税 四錢

批評

●朝日● 今世人物評傳叢書第一冊として先づ山縣有朋次に渡邊國武岡本柳之助を附錄し筆に任せて縱橫其人を評論す其當の當否は知らざれども近來傳記の流行する時に當り是等の書亦世人の歡迎を受くるものならん

●萬朝● 傳記書の世に持て囃さるゝ期に乘じて慧敏なる民友社は前人を傳ふる陳腐を去て今代の人物評論を試み、其一卷として此の「山縣有朋」一木出づこ文は平生の民友社流に似ず實を多くして華を避けたりこれ一變調なり

●教育時論● 民友社も亦勉むる哉。今又今世人物評傳叢書と云ふものを發行し、先つ其第一冊として「山縣有朋」を出せり。先づ狂介の時代より寫し出し維新前後の形勢と共に、次第に降りて、遂に今日の侯爵陸軍大將山縣有朋に至るまでの性行履歷の大概を記せり。而して著者の最力を入れたる所は。狂猾磊落たる當年の狂介と、溫柔謹直なる今日の有朋とを對照し、一片の感慨を其間に伏するに在り。亦讀者の一粲を博するに足らん。

●大坂毎日● 事實と評論とを交へて簡明流暢に敍述し去り讀者をして面白からしむ眞に評傳の名に背かず而して之に附するに一錢一厘大臣なりし渡邊國武の失敗的公生涯、其外貌に似ず詩文に長じ眛轉灑脫の敏材あり絲竹歌曲のこと解せざるなき渡邊國武の私生涯、及び朝鮮屋岡本柳之助の過去現在を評傳したるものを以てす

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

渡邊修二郎著

内政外教衝突史

全編三十章 書圖七種入

定價 廿五錢 郵税 四錢

外教の我國に傳來せしは、歷史上の一大事件にして、其國家に影響し、人心を感動せしこと甚だ大なり。爲に時の政府は鎖國排外の政策を執り。我國民は騷亂流血の慘變を見たり。故に外交の歷史を究めんと欲せば、主として外教傳來の事跡を考へざるべからず。然るに當時の事を記するもの大抵埋沒又湮滅し、今日之を得ると難し、偶ま外人の手に成るの書わりと雖も、亦誤謬と不備を免れず(鎖國以後の事蹟は全く欠く)著者之を慨し幾多の散佚せる記錄を採集し、或は舊家の秘書を探り、或は世に稀なる歐書を索め、多年の勞を積みて竟に此書を完成するを得たり。其考證最も精確、從來世に知られざりし許多の事實を闡明し、讀者をして大に興味を覺えしむ、見れ此書の一大特色にして、實に政治と宗教との關係並に日本人の特性を觀察するに於て缺ぐべからざるの要書なり

批評

●中央● 耶蘇教の本邦に傳りし以來政治と宗教との關係及び宗教と社會との關係を敍述したるもの有益にして興味ある歷史なり殊に其博引旁搜幷た著者の苦心と精力を見ゝに足る

●朝日● 耶蘇教の本邦に傳來せし以降同教と内政との衝突及び社會との關係を敍述したるもの即ち本邦に於ける耶蘇教傳來史とも稱すべきなり

●都● 我國に耶蘇教の入りたる起原より說き起して外教と内政との衝突絕ゑざりし事を敍述せるものなり一の耶蘇教傳來史と云ふべく又た我文還史とも云ふべし

發行所 東京日吉町 民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價
一冊　金五錢　郵税金五厘
半年(十二冊)前金五十錢　地方共金五十六錢
一年(廿四冊)同金一圓　方共金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話本局番號七十番

發行兼編輯人　[illegible]

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿九年十二月十日發行

家庭雜誌第九拾壹號

目錄

口繪

霧の日や（久保田米齋）

社說

日課の大切なる事……一

史談

澳國皇后の微行

マルチン、ルーテル……南柯堂……三

小野小町……其の字生……八

文藝

新年の羽子板

雲の峯（中）……三鷹子……一一

見合……桐囮舍女史……一四

談叢

女流俳句十二ケ月

電燈會社……園部緊彌……一七

勇しき孝子（三）……松ケ枝女史……二一

憤怒時の辯

群書解題

方丈記……欲東齋……二六

故舩武女史

近著紹介

田村將軍……二八

家政

數字のなぐさみ……二九

天然痘の流行……三一

內職案内……三三

ボール紙箱製造……三三

社交一班

流行の栞……流行子……三三

新年髪の具……三三

一葉女史

雜錄

小兒の世界……天水生……三六

深井仁子……黃花……三八

歌苑

勇士……三木芳紅……四七

利根舟遊の歌……新井述……五〇



家庭雜誌第九拾壹號
(明治廿九年十二月十日發兌)

社説

日課の大切なる事

遠き路を歩むものは必ず疾走急歩せず、日々一定の路程を行きて休せざる也。若し或は急歩し、或は緩歩し、或は一日に十二里十五里を行き、或は一日に五里三里にして止む如きことあらん乎、乃ち遠きを致す所以にあらず。

獨り道途を歩むもの丶然るのみにあらず、人生の行路五十年を行くものも亦此くの如し。一事をなし一業をなし、此世に生れ來りたる甲斐には何事かを社會に寄與して、歷史に幾點の印痕を留めんに、漫然として成し得べきにあらず。其行程を計りて一定の行途を歩み、着々徐々倦まず怠らず而も日として休するなくんば、人間業にて成し得べきもの何事か成らざらんや。かの五日三日は晝夜を分たず非常なる勉强をなし、既にして又忽ち幾日をも怠る如き、決して久しきに堪へ遠きを致す所以にあらず。遠大の事業は必ず恒久の心を有し必ず恒久の勞力を有するにあらざれば能はざるもの也。

而して恒久の心を有し恒久の勞方を有するに道あり、日課を定めて之を確守するに如くはなし。

人は仕事をなす時間よりも、仕事をなす前に何事をなすべきやを思考するに少なからざる時間を空過するもの也。此等の時間こそ實に何の役にも立たざる時間にして、則ち人間の一生を短くする時間とも謂ふべけれ。而して此くの如きの空過時間を節するは、日課を一定し置くもの丶さして難しとせざる所たり。

苟も日課し置ん乎、毎々着々として其事業の若干行程

を歩するを以て、若し月を以計りて、或は年を以て計らば、其事業の進捗、非常なるものとなるべきのみならず、家風にも一定の秩序を生じ、身躰にも一定の運動を有し、一定の清粛を保つ上にも心身の健康爽快を保つ上にも豫算外の功能あるべし。獨り時間の經濟のみにあらず。

是の故に一家の主人たるものは勿論、幾多の子女にも其長幼に應じて、食息遊戯にまで成るべく一定の日課を有せしめ、以て秩序ある生活に慣れしむること肝要也。唯拘束すべからざるのみ。秩序の中に自由なかるべからず。自由の中に秩序なかるべからず。

若し夫れ家の主婦たるものに至ては、家事の性質上之を掌るに方りて日課を確守し難きは止むを得ざることながら、猶大凡の日課を有し得べからざるにあらず。特に其稚き子女を有するもの丶如き、一定の順序により事をなし難き所以更に大なりと雖、成るべく一定の日課に從はゞ子女にも自ら其習慣を付するを得べし。哺乳の如きさへ時間を一定するは、實に育兒術の第一則なるを知らずや。

序ながら、日課制定上に要する缺くべからざるの注意は、必ず其中に若干の心身修養時間を設くべきことなるを忘るべからず。

勿論人々の職業により、終日身躰を勞働せしむるもの丶如きは、必ずしも別に躰軀の運動を要せざれども、其代りに、安休の時間を要すべく、又終日心を勞するものに在りては、必ず躰操遊戯乘馬散策等の躰軀を運動せしむるものなかるべからず。特に精神の修養に至ては、何人も是非共之を缺くべからざるものにして、恰も躰軀の修養に食物飲料の缺くべからざるが如し。躰軀の勞力に從ふものにもあれ、精神の勞力を事とするものにもあれ、必ず毎日の若干時を割て讀書研究の用に充てざるべからざる也。婦人の如き常に家事に勞

して社會の新智識に觸るゝ機會を缺くものは、取分け之が必要を感ず。

澳國皇后の微行

西歐各國にては皇帝皇后の往々微行せらるゝことあり現に過般露帝の佛國漫遊に際し非常の歡迎を受くるや獨逸皇帝は微行して巴里に至り親しく探聞せられたるやの報外電に見えしが今澳國皇后微行の外報に接したり同皇后エリサベタ陛下には或日伯爵夫人コルニス一人を伴ひ微行してブダペストの博覽會に臨ませられたりしが通常の鼠色服を召したれば誰とて陛下と思ふ者なくして數時間觀覽あらせられたり其の工業館に入らせられたる時の如き賣捌きの婦人は陛下に向て奥さん富札を御買ひ遊ばせ澤山に儲かります明日は開札日ですなど勸むる者多かりしが皇后は微笑されつゝ徃き過ぎられたりやがて同館の隣りは菓實陳列場にて隔ての戸を押開くときは迂回するの苦なかりしゆゑ陛下は玆を通行せんことを望まれけるに番人は掛員の外何人にも通行を禁ずれば入口に廻られよとて制したるより陛下は已を得ず迂回して入口より入らせられたり菓實陳列場に於て林檎酒の瓶詰あるを見コレは何なるやと問はれけるに林檎酒なりとの答を聞かれ一杯飲まし呉れずやと仰せられけるに側に居たる少女は奥さん御免遊ばせこれは陳列品なれば封を解くこと叶ひませぬと答へたれば皇后陛下には單に惜い事と仰られ又も過ぎ往きて牛乳陳列場に臨ませられたり陛下は渴を覺ねられける折とて一杯の牛乳を求められ先づコップを取りて御手づから少許の牛乳を注ぎ入れ飲み干して代價は如何なるやと仰せられけるに賣捌人は奥さん餘り僅か召し上りたる故代價を申上兼ます戴かずとも宜うございますと答へたり皇后はさらば一杯の代として取られよとて二十五クレトツエルを投じ匆々にして立ち去られしが其隣館にて計らずも某貴顯の縱覽せる者に出遇ひて見露はされ一同恐縮の思ひを爲したりとなん（東京朝日）

史談

マルチン、ルーテル

南柯堂

再昨の國民新聞は傳へていふ、眞宗本願寺の内政いよ〳〵亂れて又いふべからず、敎林の學生相黨與して奮ひ起り、極力改革の事を企だつ、要路の俗僧是か抑壓

のことに力め、衝突日々に激しきを加へて、六條の附近恰かも戦場の觀ありと。

讀み畢つて紙を投じ覺えず三嘆、長大息するもの漸久し、嗚呼執事遑慾の害一に何ぞ玆に至る、されど幸ひに義徒のあるあり、僅かに人意をつよむるに足る、今にして極濟せずんば祖師永年の傳燈久しく滅して又見るべからざるに至るべし。



マルチンルーテル肖像

今は誠に改革の機なり、誠に眞宗救濟の機なり。

心は遠く歐洲近古の史に馳せて、宗教改革の當時を思ひ、義人マルチン、ルーテルが傳を譯す。

彼が手記として世に傳ふ、余は農民の子なり、祖父も祖ゝ父いつれも變らざる農民なりき、さるを余が父に至り初めてマンスフィルドの地に移り、業を改めて鑛夫となれり、然して余は其地に於て生れたり、故に余も亦其業を繼いて鑛夫たるべく又は農夫たるべかりしなり、然るに僧侶となりし事の意外は大ひに人々を驚かし、又父が意を苦めたりと。

是いさゝか事實に違へり、且つや其名の如きも亦 Luther と傳へ Luder と記し或は Lother といふなど書によりて一ならず、恐らくは手寫人より人といつしかに、其誤ちを傳へしなるべし。

信すべきの紀傳吾人に告ぐる左の如し。

彼れか父其名をハンスルーテルといふ、アイゼンナハ

に近き小部落モエルクといふに家す、母はグレサ、マーガレットとて、フランコニヤ洲なるノイスタットといへる地の或、代言人の娘なり、家計元よりも豊かなるにはあらざるも夫婦相和して樂しく其日を送りしに、思ひきや不慮の禍父ハンスが身に降りかゝり、其永年の地の住居叶はず、遂に彼は妻を携へて住み馴れしところを去れり。

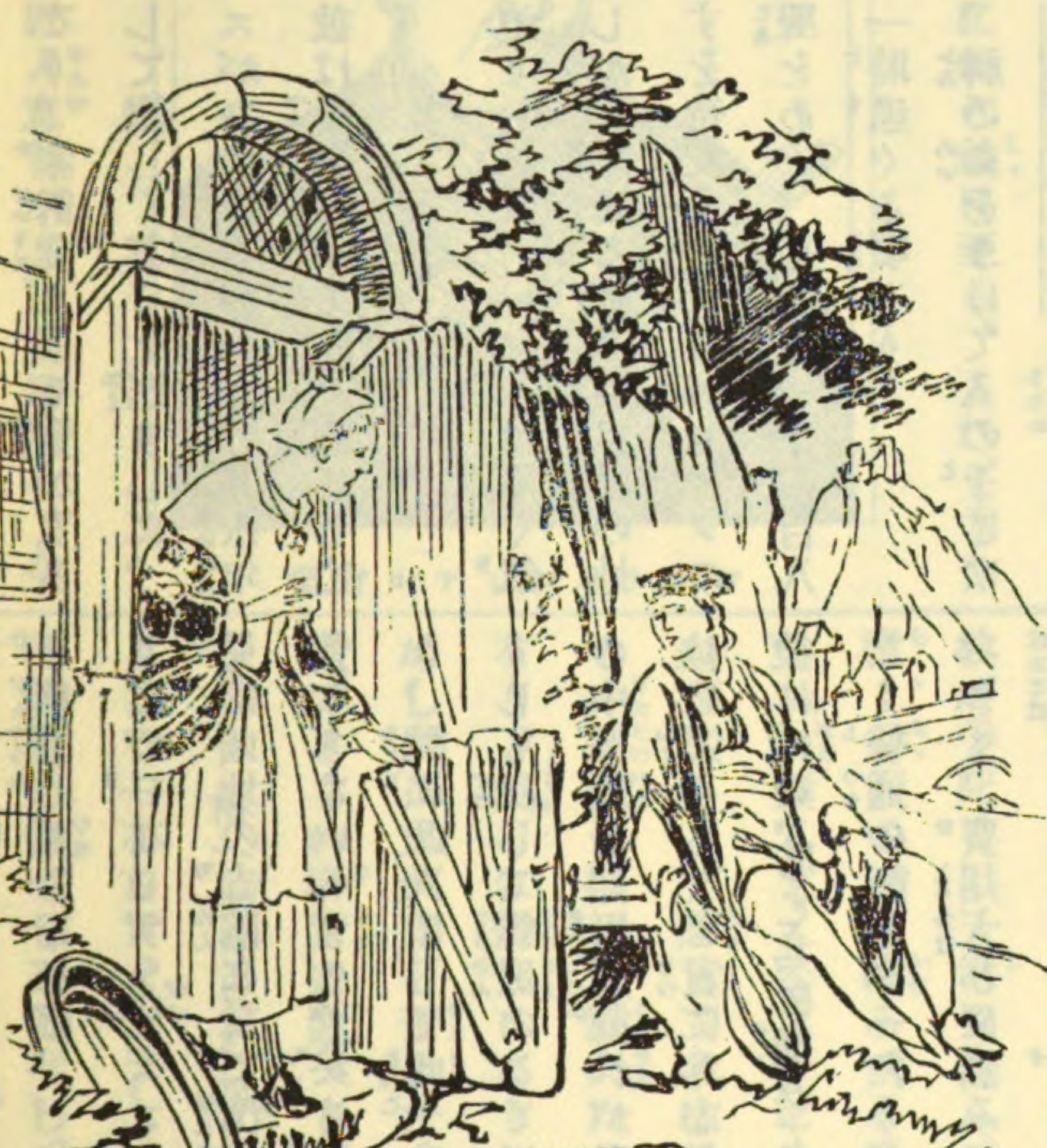
其時妻は懷妊分娩の期に迫りしかば、ハンスは痛く氣遣ふて途中尤もいたはりしが、果せるかな其目的の地なるマンスフイルドに達すを待たで、アイスレベンの逆旅に於て、偉人呱々の聲をあぐ、是實に一千四百八十三年十一月十日午後十一時過ぐる頃なり。

考ふれば實に奇なるかな、神の命をうけて人の子となり、救の道をつたへたるイエスキリストの生しも逆旅雜沓の中に於てとなり、年所こゝに一千四百以上を隔て、イエスキリストが心をなさんと生れ來りし余がルーテルも亦然り、知らず瞑々の天契相合するの人意を以て計り知るべからざるところあるか。

日柄漸くたちければ、ハンスは其妻を勵まして玆を立ち出で日ならずマンスフイルドに達したり、然して幼兒は此地の寺院に於て洗禮をうけたり。

貧なりといへども、父も母も共に記すべきの人になりき、誠に此人にして此子あり、ルーテル彼れが如くなりしも決して偶然のことにあらず、衣食こと足らぬ勝の中に於て、攝用彼れが敎育の資を惜まず、日ごと學校に送りしなど實に其志を見るべきなり、拔群秀才の彼れは業、時と共に進みて、優に同輩の人を凌ぎ、間もなく普通の課を卒へたり、進んでは高等の學校に入るべきも、費用大ひに嵩みて到底能はざるの恨ありしを程遠からぬあたりに住みしヨーンワイパイゲンが寡婦にウルサといへる老女、いたくもこを惜みて、我いさゝかの補助はなすべし、如何にもして高等の學校に入

れたまへと、義を以て父と母とを皷舞せしかば、兩親は共に〳〵喜び謝し、玆に彼れは其學を廢せざるの幸を得たり、後來に於ける宗敎の大改革、歐洲全國の天地を搖かし、惹ては莫大の裨益を世界萬國幾億の人に與へし、彼れが大業用を攝して彼れを敎育せし兩親に負へるところ元より少なきにあらざるなり、されども亦緣もゆかりもなき此老寡婦が斯かる救助あらざりせば、或は如何とも知るべからず、此老寡婦の如きものこそ實に間接に偉業を助けなせしもの、蘇峯先生が所謂無名の英雄なり。兩親の供する處と、老寡婦の補助のみにてはいまだ不足の恨あり、玆に於てか彼れは其頃一般に貧なる書生がなせし如く、樂を奏てゝ巷にさまひ、神の道の爲に我を救へと多くの人のなさけを請へり。



音樂はかつてより彼れの尤も好みし處、音樂は實に豫言者の伎藝といふべし、惡しき心の亂をなさめ、汚れを清めて、惡念の跡を斷ち、人を神の如くならしむるもの音樂を描いて外にあらず

と、いひしによりても如何に深く嗜みたりしかを知るべし。
きくもの各々感に堪えて彼を惠むに大ひに其乏しからざるを得たり、さるに或日の事なりけり、殆んど終日さまよひ暮らして一の得るなく、迫り來る饑につかれいよ〱甚だしく、或る家の前に茂りたる柏の樹の下に古びたる床几に凭たれて、大ひに其身を心にかこち、低聲いと憐れにもうたひたり、折ふし主なる人不在なるも、幸ひに家婦のありて、歌をきくまゝにいたく彼れを憐れに思ひ、立出でゝ導き入れ、様々の美食もて彼れを饗し様々と身が身の上の事をきいていよ〱滿身の同情を傾け、又こそ來ませ夫にも告げよきに計ふことあるべしとて、篤く惠んで送りかへせり。
彼れは其厚意の程を深くも謝し、必ず忘れざるべしと、其日はそれにて歸りたり、それよりは時々彼處に行きて遂に其主なる人にも逢ひ、其志と貧困のことゝを告げたりければ家婦よりかねてきゝ居し身いよ〱感じて、それよりは交はり日を追ふていよ〱深く、能ふべき限りは必ず補助せんと誓ひたり、茲に於て彼れは其父母の與ふる處、老寡婦の惠む處、と併せて事皆滿足し專心、專意、學を修むるを得るに至れり。
一千五百五年七月十七日は彼が傳記に於て特筆大書すべき不思議の日なり、朝疾くより兩三の友と相携へて郊外に散策せしが、晴れ渡る空如何にせしや忽ちにして曇り來り、宛然墨を流したらんが如く、咫尺辨ぜず、あなやといふ内に大雨盆を覆して襲ひ來れり、されば歸らんとも更に能はで或木の蔭に宿りしに電光一閃霹靂其上に落ち來り、友はいづれも打たれて死せり、幸ひにして恙なかりしに彼れは其無慘なる死骸を見て、曉天實地更にやまず、茲に僧侶たるべきの心を起せり。
父ハンスはこの言を聞きて彼れにむかひ、堂々たる男

子他になすべきの事なきにあらず、何ぞ進んで大事をなさんとはせで、寺院ふかくたれこめて、世と隔離せる僧侶の如きものたらんとすぞ、と言を盡くして諫めたりしも彼の心は動かず、唯々アラウタス及びパーヲルの書のみ僅かに兩三冊を携へて、暗夜家を逃れ出でアルフルス洲なるアウガスチンの寺院に入れり。是彼れが大活劇の序幕にして、天より其大任をうけし初めの日なりけり。

時恰かも法王の驕奢其絶頂に達し、頑民の育信更に一つも疑はず、數萬の俗僧其間にありて慾を逞ふす、彼其樣を見て大ひに慨し、余が大任は斯ることを革むるにありとて、義人は信仰によりて生くべしといふ聖經の句をうしろに負ひ、蹶起奮然とゝにたち、艱苦なめ盡くして、所謂新經なるものゝ基を開けり。

六條につどふ無數の義徒、知らず其中の誰か終りを全ふして、遂に我國のルーテルたるべき。

小野小町

其の字生

古往今來殆んど三千年に亘る日本帝國の歷史中、才女名媛の顯はれたるもの少なからず、され共小野小町の如く、普く知られたるものは稀なり、詩に作られ、歌によまれ、劇に仕組まれ、畫にかゝれ、美人としてのきこへ、歌仙としての譽れ、藉々相傳ふることにも似ず、一代の行狀事蹟、漠として更に其要を得ざるは實に遺憾なり、僅かに逸史のあとをたどりて、覺束なくも調へ見るに、古しへは一國より各々一人の采女を內裏へ献ぜしめ、これを后町の內におく、然してこれ等を小町といへり、されば小町とは唯一人の名にはあらで其一群の總稱なり、たとへば腰元お附なんどいふが如し、すでに仁明天皇の御時には、六十餘名の小町ありしと古史に見えたり、これ等小町のいづれも任滿ち

発されて故郷にかへるも人は依然小町とよび、其身死して埋めし墓所を小町塚とは稱へなせり、さてこそ國々に小町塚といふもの今に多く、殊に美濃近江大和などに殊に多し、さるを後人の深くも察せず、小町とは唯一人なりと思ふが故に、誤謬いよ〳〵誤謬を重ねて、一も其正を得ざるに至れり、即ち在原業平朝臣陸奥に下向なせし時、髑髏の目より薄生ひ出で、秋風の吹くにつけてもあなめ〳〵と咏ぜし小町は、小野良澄が娘なる小町なり、文屋康秀が三河掾となりて其任國に下りし時、途上相逢ふて昔をかこち、身は浮草の根をたへて添ふ水あればいなんとぞ思ふと吟ぜしは高雄國分が娘なる小町なり、思ひつゝぬればや人の見えつらんと咏じ、或は業平舞の袖などいひしものは出羽の郡司小野良實が娘の小町なり、弘法大師にめぐり逢ひて、壯なる時は驕慢尤も甚だしく、衰ふる日は愁嘆殊に深しといひしは常陸國玉造義景が娘の小町なり、いづれもかつて後櫻町に仕しもの元より一人なるにあらず、故に時代の先後、事蹟の相違多かるべきを、一として語るが故に顚末遂に纒まらず、彼が如きに至りしなり、然して其數多き中に就いて、小野良實が娘の小町は美人にして、和歌にもいたく秀でたりしかば、殊にすぐれて傳へられ、他は蹴押されて其色なく、何事も小町が上としいへば、是に附會するに至れり、即ち六歌仙の一となり、又百人一首にも出でたるものは、この小町にして、平城天皇の大同四年出羽國小勝郡小野の里に生れたり、母はいやしき里人の娘、父良實が在國中の側室なり、生長の後父につれられて京に登り、才色を以て其名頓にたかく揚れり、老後諸國に行脚して昌泰三年旅中に沒せり、されば九十三といふ長壽を保ちしものと知らる。

世に玉造小町壯衰記といふ一書あり、弘法大師の筆ともいひ、又は三善清行が作ともいふ、いづれか是なる

や定かならず、小町衰へて道に食を乞ふの事を記せり、是上述玉造義景が娘の小町かはてなるべし、されば弘法大師の筆といふ方當らんか、後人の作しける玉造小町といふは是より出でたり、其他神泉苑のみきわに出でゝ、雨乞の歌を咏ずれば、霄雨忽ちにして來る雨乞小町、御歌會に歌書の疑筆を洗ひ落し、大伴黒主の鄙を辱かしめしといひつたふなる草紙洗小町、深草の四位少將が百夜も通ひし通小町、關寺にかくれて住みし關寺小町、『雲の上はありし昔にかはらねど見し玉たれのうちや床しき』と上よりつかひして下されし和歌を僅かに一字のみ改ため『雲の上はありしむかしにかわらねど見したまたれのうちぞゆかしき』と其まゝの返歌を上りし鸚鵡小町、行きなやみては路傍卒塔婆に腰うちかけて、やすらひしといふ卒塔婆小町、以上所謂七小町、事各々奇なりといへども、恐らくは過半後人の作なるべし、猶々後日これ等を調へていふことあらんか。

本年の羽子板

本年は、錦地縮緬類の高直さ桐材、職工手間賃等の非常に上りしさにて昨年に比し三割五分より上物は五割強の高直なれども景氣は至ッて宜く十軒店其他の羽子板店にても目下頻りに製造中なり今其小賣直段を聞くに「上物の部」孫板尺寸物一枚に付五十錢以上一圓四五十錢まで、尺八物一枚に付一圓以上二圓五十錢まで、二尺物一枚に付一圓五十錢以上三圓五六十錢まで、小京十枚に付二圓以上五圓まで、「安物の部」尺物一枚に付五十錢以上一圓まで、小相十枚に付六十五錢以上一圓三十錢まで、大相十枚に付七十五錢以上二圓五六十錢迄なり、サテ押繪は例の如く歌舞伎座、明治座の常り狂言最も多く中にも賣行よきは團十郎物にて樓門の五右衛門、石田の局、地震加藤、道成寺、助六、文覺、毛剃、鬼一、山姥、景清等、菊五郎物にては忠信、松王、權太、猿廻し、貢等、左團次物にては智惠内、武松、次郎左衛門、傾城忠度等、此外福助の雨乙小町、常盤御前、八つ橋、揚卷、米藏の虎藏等にて壯士役者にては伊井の權八、八重垣姫など

文藝

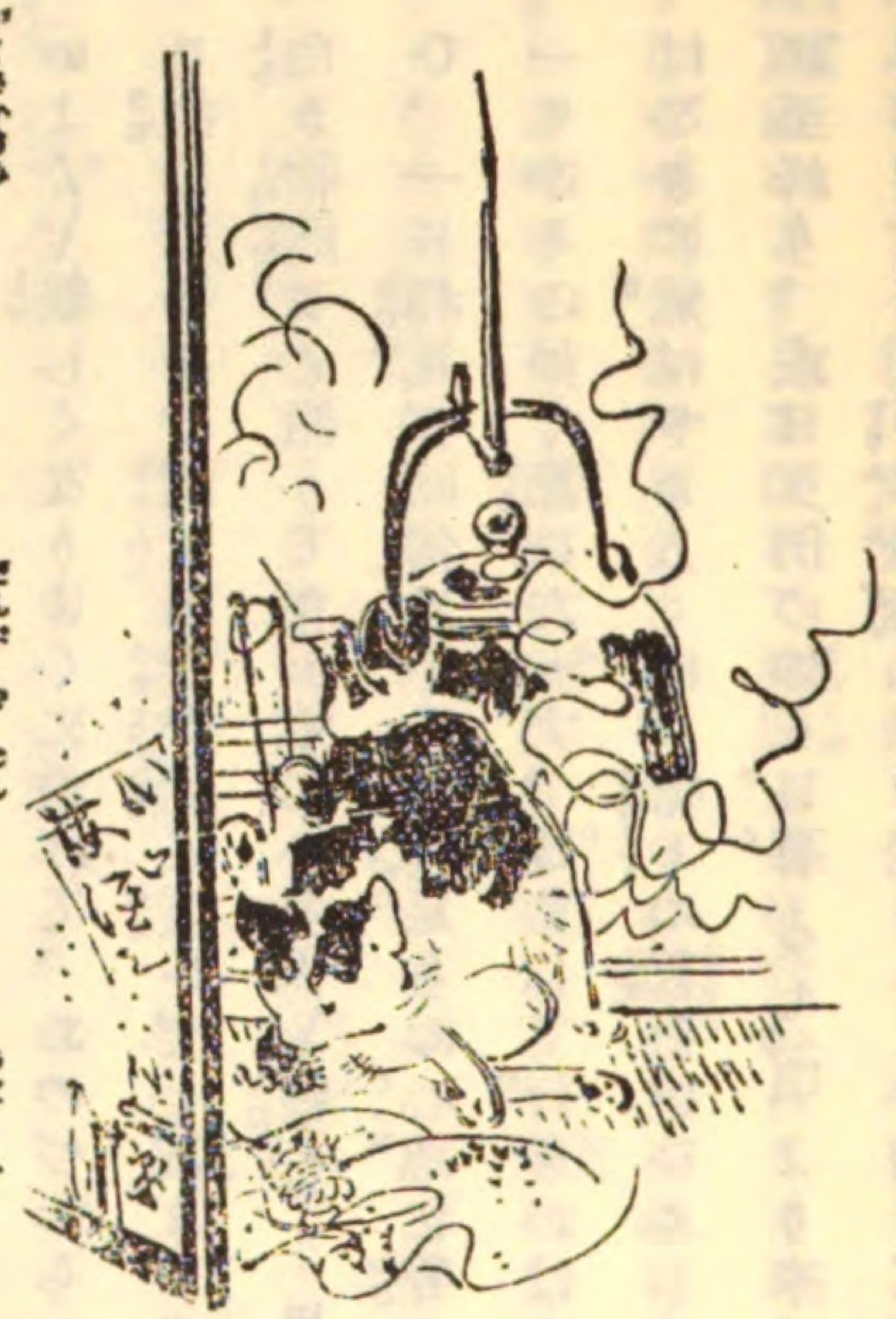
雲の蜂（中）

三鷹子

玉敷の都を去ることさほど遠きにはあらざれども、流石には田舎の事とてよろず開けず、昔より六つかしき書讀みし人も少なく、深き物の理を知り得たる人も多きにあらず、僅かに官費三年の修業、一部敎育の譯書を捧讀し得る、師範學校卒業の男を此上もなき學者先生と思ひかしづく處なれば、梧一の學才博識は忽ちにあらはれて、四邊其名を知らざる人なく、近隣の村々までも響きわたりて、もてなしの程さゝやかなる小學校の雇敎師としては過ぎ餘る程なりければ、さながらに淺間敷人の心かな、かたき心もいつしかに我知らず識らずゆるみゆき、初めには禁ぜし酒も飲むを辭せず、時としては又遠からぬ府中の驛にいやしき花を眺めつる事さへあり、包まんとすれども惡事千里、誠にかくれたるより明かなるはなし、人々の目にもとまり耳にも入り、よからぬ風潮とり〲に傳はりければ、事にかたき田舎人の信ずるにも早ければ疎んずるにも亦早く、昨日までもてはやしたるいづれも、追々に其手をひいて、各々爪はじきするに至れり。されば日頃より、己れが才の足らぬを咎めず、後れ來し梧一に其名を奪はれしをいとも口惜しく思ひなせる今一人の敎員は、此機會ゆめ〲失ふべからずと、或は口を公けの事にかり、百方の奸手段を以てひたすらに、そを退けんとをたくめり、事斯くまでに達せし上は、萬づ力を添へし、老實の橋本左京何條これを咎めざる、苟くも其身敎導の大任に當り、たとへば染みやすき白糸の如き兒童の上にたゝん者、斯る所業のたゞかりそめにもあらんには、是一村の爲いとも輕からざることなり、一

擧一動敬ふる人に見習ふて、よきにもあれ悪しきにもあれうつり易きはいはずも知るべし、麻中の蓬、紫のいかで朱を奪はざらん、頼み甲斐なき心かな、與すに難き所業かな、一身を引受けし我が身人々に對して今更にいひ説かん辭もなし、今日ぎりに職を辭し共に予が家をも亦去り玉へ、一杯の飯一杯の茶も予が君の身を助けしは、そも〳〵何の故なるか、今改めて言はずとも知るべし、さる心にても決して〳〵將來久しきにわたるとも、到底獨立の事はかたかるべし、縁ありて逢ひし身なれば、及ばん限りはと思ひ込みしも今や詮なし、予も亦心に快ならねど今日ぎり思あきらむべしと、言葉するどく言ひはなたれて、梧一今更にかへさんこともなく、指うつむいてのみありしが、暫くにして首をあげ、是といふもといはせも果てず、左京はさることをきく耳持たず、唯とく〳〵に去りたまへと、いよ〳〵うけひく色もなし、梧一すご〳〵として部屋にかへり、種々考へれば考ふ程、一片も我れに理のおるなし、嗚呼誠に今や老人の言ひしが如く、頼み甲斐なき我身なり、取るにも足らぬ田夫野人に持て囃されしとて、そがために心驕り行きしとは、そも〳〵何たる愚かさぞや、小成に安んずとはかねて聞きしが、是は又其小成の數にも入らず、小の又小唯一時の安意にして、更にいふべき程にもあらず、百難前に横はる一身の行路、荊棘排し盡して進まずんばあるべからず、慢心放意恩人の心を損じ、又己れを知りて慈愛の子を托したる人々に對しても、思へば〳〵面目なしと、改悟交々に生じては、さながら針の筵にあるが如く、去らんか、親密なる清水の心を如何せん、留まらんか左京の心を損じたる上はやがて全村の意にそむきしなり、進退一に其度を知らず、叶はぬまでも一度は詫びて見んと、八方の人々に依頼せしも大抵は例の教員が奸計に各々捨てゝ顧みず、唯々これを遠くのみ、皆見

ぬふりをなすが中に、三田某とて其村の議員なる人いとも梧一が才を惜み、かつは教員の奸計を悪み、如何にもして我身橋本に説き見ん、老人さへに承知せば、餘は是一臂の勞にも足らず、身にもかへて盡すべし、必ず心を痛めたまふな、されどよく／＼思ひたまへ、



學才君が如きを以て田夫野人にさへも疎んじらるゝは、實に／＼殘念ならずや、顧みては少しく其身をこれ謹み、早く池中を出でたまはんこと、切に／＼進むなりと、八方殆んど皆敵なるに、是は誠に嬉しき心

一々に感銘して忘れざるべし、唯々よきにといふを後に、直ちに橋本が家に至り、言を極めて説きしかば、思ひしよりも早くとけて、初の如くかはることなく、又校門をくゞるに至れり。術其功をなして怨敵は拂ひ盡せりと、喜び極めし教員の失望今更にいふをまたず、されど又如何ともすること能はず、面白からぬ面色態と打とけて、日頃にかわらで交はりたり、梧一其後は改悟初めにかへりて初よりも猶かたく、孜々として敎えて倦まず、唯人々の望を元に返さんとつとむる傍ら、又己が立身の策を講じ、勉强日も足らぬ有様に、左京今更に深く感じ、更に力を添へたりけり。さるにても梧一は三田の心のいと嬉しく其後は日増に親しく行きかひたり。人生眞心を以て是にむかふ誰か又眞心を以て是をむかへざる、大ひに梧一の心を愛して三田も亦殆んど他人とは思はざるの思ひ、さながら父子の如き觀あり、三田が家に一人の娘あり、お浪とい

ふ、今年妙齢まさに十八、草深き鄙に育ちし身の元より花の色香もなく、躰度風采目をひくに足るものなし、されば梧一とて初より知らざるにはあらざるも、更に心にもとめでありしを此程そが父を初め母の親といよ〳〵親しくなりゆくにつれて、おのづからお浪とも打とけゆき、樣々の浮世話に笑ひどよめき、或は面白き物語など語りてきかすにます〳〵親しく思ひあひ、一日相見ずば何とやらん物足らぬ心地に覺ふ、梧一も亦その如く思ひたへず、日として行きかはぬことはなきに氣はやき人々は、樣々の言をいひふらすまでに至れり、或日又例の如く日暮るゝ頃より來て見れば、父も母も折節不在にてお浪とそか弟とばかりなり。いそ〳〵と出むかへて互に圍爐裏の側にかたらふ、弟は疲れたりとてそのまゝに前後も知らで眠り果てけり、二人は暫く指うつむき、今更にいとうゐ〳〵しく、其まゝ時を移せしが、やがてして梧一かたき口を開き、他にかこつけて心をいふ、お浪はたゞほゝゑむのみ言葉もなし、其うちに父母とも〳〵に歸り來り、事は其まゝにして打たへたり。夜も更けぬ又こそと梧一いとまをつげて其まゝかへり、その夜は唯夢にあけて、明くる日は朝疾くより、例の如く學校に行かんとて、用意してまさに出でんとする時、たま〳〵來りし一封の書翰、例の清水より出せしものなり、何事と封きり讀み行けば、先頃出だせし競爭論文、首尾よく撰に當りて登第せり、急ぎ京にかへるべしとよろこばしき音信なりけり。

見合

桐廼舍女史

數ふれば今年もやがて呉竹の只ふしの間となりぬるにつけて、思ひよりし事侍れば貴き賤おしなべて女の友だちに告げまゐらす、そはゑにし定めの事にてなむ、

此縁談定めの事は何時といふけちめもあらねど、わきて年の暮行頃は此處彼處に志げく見聞は、何事も年の内にと急がるゝ世の人の心ならんか、此事によりて見合てふ事の行るゝは、最頼母子氣なき事と思へるは妾のみならず、種々の論ひは兼て知らるゝ事にしあれば殊更に申さす、さはとて外國ふりに我からもとめんもうしろめたくあたらをとめにあらぬ浮名立られむも口をしきわさなり、兎にも角にも皇國ふりに親にしたがひて行末の事はからるゝは最能き事と思へど、我心にかなはぬ事も得いはずして思はぬ方に嫁なば、いかにかなしと怨らむ又思ふ事云ひ出ても、親の强て許可されぬは酷き限りなり、されば親は子の心となり子は親の心となりて何事も語ひ合てこそ、長く樂しき緣の糸も結び留給はめ、妾が見合てふ事もよしと思ひとりしは、此頃の事にて某人の愛娘にて女の貞操はさらなり、讀み書裁縫を始蝶よ花よといそしみ學べる中に、糸竹の道さへをさなからねば、親はいよ〳〵愛て廿才あまり二ッ三ッになれるも猶秘置しが、人々のとく嫁らせよとすゝむるに親も今はと思ひ定めたりしに、とみに良き聟がねありと聞て母君は甚喜びて、良辰えらびて見せまゐらせんといひやりつゝ一日を千代と待わびしが、やがて其日と成しかば八聲の鷄のうたふもまたで起出つゝ、恥らひ居娘を幼女のやうにすかし拵ひて、今日を晴と粧ひたてゝ待程もなく聟君はおはしぬ、出迎へたる人のいとうるはしなど私語あふを漏れ聞し母君は、嬉しさ面にあらはれ嫁君は頰に紅葉ちらしぬ形の如く爲やもはてゝ暫時おしならべるを見しに聟君はまことに玉をのべたらむ如く、光君の昔も斯やと忍ばるゝに今迄花と愛し嫁君は、色香もうせて見るべくもあらねば母君はひたと胸つぶれて堪ずやありけん、此席をまか出しかに聟君もつと立て歸りたまひぬ媒介せし人も斯まで見をとりせんとは思はざりしにや、心も

となげに、明日を契りて歸りぬ嫁君は露を含て打萎れたるさまのあはれなれば、母君は慰つゝ、さりともとそらたのめせし甲斐もなふ明日をもまたで火ともし頃御文まゐれりといふに先驚かれて取手をそしと拔き見れば

なつかしき色ともなしと何にこの
　末摘花を袖にふれけむ

一首の古歌に縁の糸を絶はてぬ思ひきや、世は斯も強面ものか見合は斯もたのみなきものか、嫁君とて見にくしといふにもあらず、まして心も技も勝れたるを知らで只一目に捨んとはと、怨みたりしが思ひかへせば見合はよき事なり捨られしは此嫁君の幸なり、天晴男子として一夜の春をもとむるうかれめは知らず、百とせを契る妻を撰ばんに只容貌のうるはしきをのみ愛るとならば、心はいかにきたなきも喜びて迎へとらんよしや、心も清くありともいつまで花の散らでやはある、かゝる時はたゞちに捨られん人も我も光君よと思ひあかれる、男子も心は瓦にも劣れり假初にも、かゝる浮たる人に身をよせなばいかにくやしき世にかあはむ、いまゆ後見合し給はんとならば、先互に伎藝を試て後其人の品さだめもなしたまへ、みめより心といふ事もあれど後の悔なき樣えらびたまへ、聊は心に染ぬ事有とも伎によりてゆかしう見ゆる事も侍れば、おのづから樂しき中ともなりなむ、男女のけぢめ有とも心のまさりをとりはあらじかしとき事ながら上津世は皇女も御位に即せたまへるならずや、さるをいたづらに男子にもて遊ばれたまひそ、男子にのみ見られず、女も男子を試し見給へ、さはいへ嫁て後は良人に隨ひてゆめ勝んとなおぼしたまひそ、萬良人の心にたかはぬ樣心をこめて家を治、妻たる道を盡し給へと、暮行年のいとなみもさし置て一筆申さゝくるになむあなかしこ

女流俳句十二ヶ月

なにかし撰

一月　父母のすこやかにして雜煮かな　照女

二月　初午や馬鹿な顔して馬鹿ばやし　季子

三月　春めくや四條の橋の人通り　光子

四月　杜鵑淀の川瀬の朝ぼらけ　峯女

五月　軒並に菖蒲ふきけり片田舍　糸女

六月　朝顔や根岸は水のよいところ　種女

七月　かぢの葉にかくこと多き遊女哉　その

八月　蓮の中辨才天のほこらかな　大子

九月　鉢植の菊美しく咲にけり　清子

十月　明日江戸へ行くべき夜中の時雨哉　さみ

十一月　風もなき天長節の日より哉　龍女

十二月　小車のめぐるは早きしわす哉　蕗女

談叢

電燈會社

紫嬌

●新聞の切拔

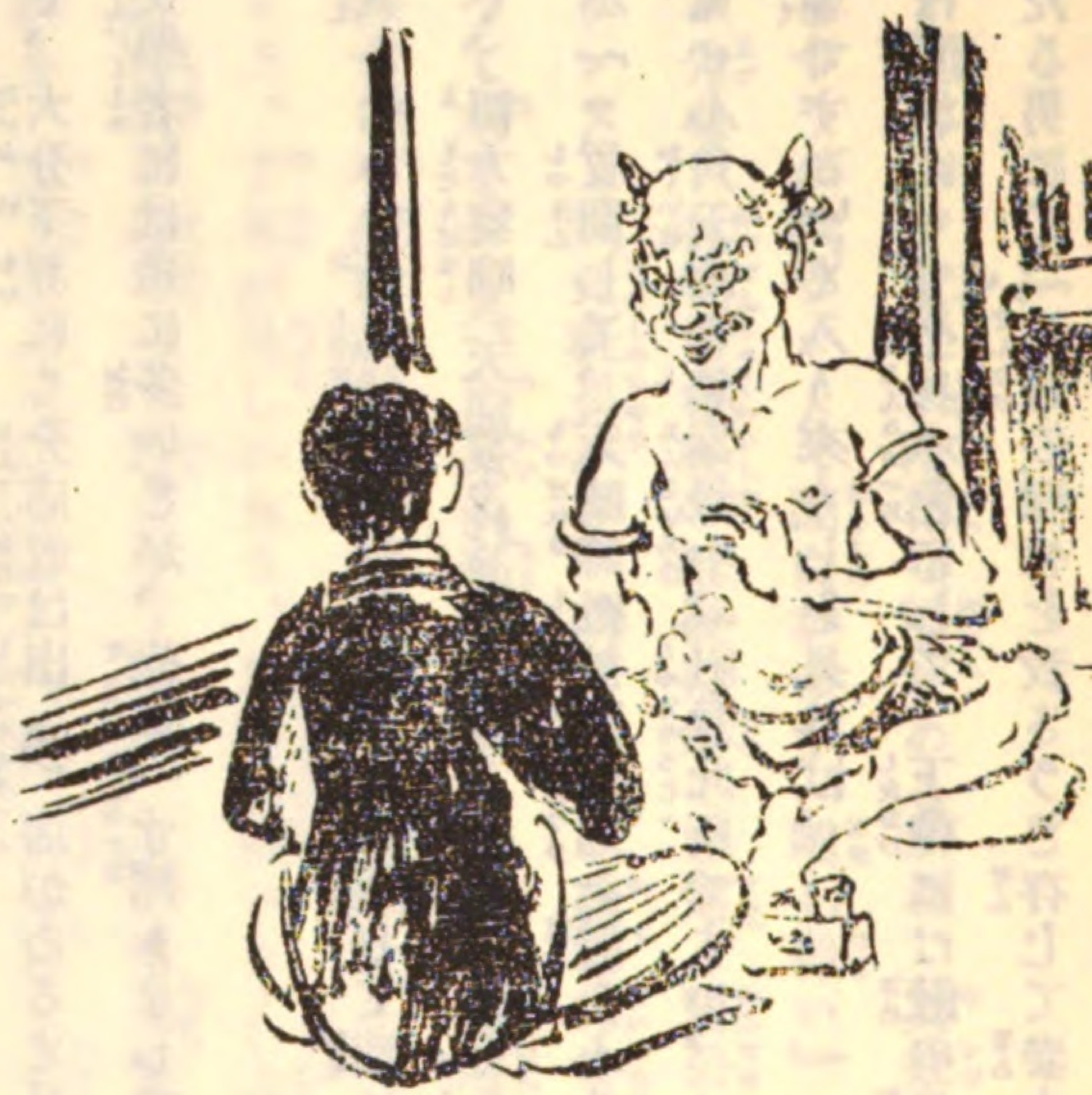
頃日日本橋區の中央に、一ツの新會社が設立された、社名は是迄もある電燈會社だが、不思儀なのは滊關も發電室も蓄電器も何もないのだ、ナレド何處にか一種の器械はあると見えて、轟々たる雷鳴は、二六時中實に盛な事である、所で某新聞記者何某が、如何なる新器械を何國から買入たものかと、例の好奇心に誘れて、或日新會社へ出掛た所が、成程、電燈會社の名に反ず、白堊夕陽に照添ふ壁間、數千の電線は蜘蛛の巣の如く、又盛蕎麥を投出しが如く、一見其社運の隆盛を表するにぞ、不取敢驚愕一番して、唯見ると、入口が更に解らぬので、是はと計り困り果て、社の周圍を三篇廻つて卷煙草を吸ふ時、何か御用ですか。コロ〳〵〳〵〳〵』と屋根の上から聲が爲るので、『ヨウ是は、實は何です、餘り御社運が隆盛なので、機械場を拜見致し、且つ御社員に御面會致して、少々伺ひ度い事もあるで、『ハア〳〵左樣ですか、デハ此方へ』コロ〳〵〳〵〳〵

と舞下つて來るかと思ふと、あら不思儀や、丹塗の不動が、古寺の仁王の忰か、繪にて見し雷の摸造品とも疑るゝ小僧なれば、『許せ』と一聲叫び樣、馳け出す襟首ムズと摑れ、ハッと思へば大屋根の中央に下されたので、二度吃驚、一躰貴樣は何か、汝愚圖々々すると摑み殺すぞ』『私は此社の子僧なので、サア何卒此方へ』と先に立て案內するので、何某も詮方なく、何なる物か化物なれば鹽漬にして喰るゝ迄と、一番假に猛者と成て、『ヂヤア社員さんに面會を』『宜しうムいます、……オット危險』と屋根に開てる二間四方方の穴を這入と、直に小部屋で、普通なら帽子でも掛て置ふと云ふ室だが、大皷、太バチ、山の如く積れて、大團扇二ッ、布袋一ッ、ハラナと次の入口を見ると、應接所と札が有て、別に紙札が張てある、夫に。

お乘物は御無用に被下度候

いよ〳〵油斷ならざる不思議と、導るゝ儘其室へ這入と、椅子も机もなくて、板敷なれば、ハテ如何する事かと立往生をきめて居ると、ゴロ〳〵と雷神おどろ〳〵と物凄く、戶を排して入り來るは、以前の子僧に倍て最太なる怪物、全身朱なし、眼圓に鼻低く、口は鰐の怒れるに似て、髮悉く縮み、下帶一ッにして是虎の皮の切立、否剝立にして、生血さへポタ〳〵と垂にぞ、偖は雷公なりしと、一層戰慄だちたれど、社員の名あれば殺さるゝ程の事、よもあるまじと無理に氣を張り、私は何某新聞の記者ですが、貴郎は御社員ですかな』『ハイ私は社長で』『ハ、ア左樣ですか、一躰御社名は電燈會社とムいますが、失禮ですが貴郎方は何國の方で、お名前は』『ハ、ア私社の者は皆天國生れでな、貴郎方が俗に雷神、又は雷樣なぞと云るゝ者で、是迄淺草の雷神門、又雷おこしの店、其他各地方へ雷神樣なぞと祭られては、下界へも參りましたがチ、近來電燈電信電話なぞと、大分人間界の小使同樣に使は

れる輩があるので、一層持合せ物で巨萬の利を獲る事が出來るならと、皆商賣氣を起したで、第一着として



此會社を設立したのです』『成程充分御説のある事で、然し機械等は何國よりお求めになりましたか』『夫がさ、持合せ物だから、機械等は用いんのです、唯壁へ各得意先へ通ずる電線の端が出て居て、是へ我々が一寸手を添へて置きさへすれば好ので』『成程、至極容易な理で、序手に伺ひますが、此應接間に椅子の無のは』『イヤ是は貴郎も御承知でせうが、畫にある如く、我々は時折座れば踞座をかきますからな』『夫から此部屋の入口に乗物御無用に被下とありますが』『彼はな、天氣雲へ乗て參れば宜が、兎角社員は雨雲で來ますから、社内を穢く致すから』『へ、ヱー々御尤で、デスが彼處に大團扇と布袋がありましたが、貴郎方のお持物は確太皷とブチでしたと覺えて居りますが』『左樣です、私共のは仰る通りで、彼は今日風の神が相談に參つたので』『ハ、ア風の神殿も何が電氣に御關係がムいますかな』『左樣さ、彼は今後當會社の重役と成て、專ら風力電氣を起す計畫がある爲に』『ハ、ア、シテ見ますと天國にも樣々な物と申すも異な物ですが、其職分で種々なる方々がありませうな』『勿論です、陸軍大臣が西郷

星、大藏大臣が金星な』『成程』『彗星が衛生課長』『フ、ン』『雨の神が散水會社長で』『ハア』『イヤ夫に不思儀なのは、下界同然此水まき會社に關係して居る煙草屋が天狗で、大分下界にも分店或は出張店があると見えて、文學者には殊に多いとが、先日一寸聞きましたテ』

記者何某も始めの景色何處へやらで、興に乘じて怖れ氣もなく、四方空咄(天國なれば山でなし)に餘念を失ひ、何か一ッ質問して、天晴歸社後天眼通を誇らんものと、兎せん角云んと思案最中、『社長此所ですか、イヤ御來客ですな』と入り來りしを見れば、社長とは面かはり、全身水色にして、下帶には鮫の皮を用ひたる男にて、『先日の報告を致さうと存じて參りました』『ハア左樣ですか、龍宮城の正門のは如何なりましたな』『矢張五百燭で、乙姫の化粧殿のは悉皆眞珠で粧飾しなければなりません』『ハ、ア左樣ですか』

何某は社長と水色の雷とが談話を聞て、『ハテ此奴は何だしらん、龍宮だとか乙姫だとか云ふが、一躰何を爲る男か知らん、此奴聞て見れば必ず新聞種になるぞ、』と思案して、『社長、失禮ですが此お仁は何誰で何を爲るのですか』『ウン此人ですか、是はな、天國で雨を下界に降す時、時々節々龍神に應援を依頼する爲めの使者を勤めて居た男ですが、當時は當社に居て、水力電氣を起して居ります』。(以下畧)

* * * * * * * * *

●記者の談話

儲て是迄載て參つたのは電燈會社訪問記と云ふ標題で、某新聞に掲載された雜報を解り易く書き改めたので、是から記るのは其雜報を書た記者を、例の紫嫦が訪れた、是も訪問記なのである。

或日記者何某の家へ出掛け、

『君は頃日例の電燈會社へ行たさうだが、誰しもある事で、新聞へ掲載しない面白い咄を持てるだらう、果して御持參なら少年文學の材料にするから聞して呉れ給へ』

『ハヽア宜しい、實は大滑稽な咄があるがね、其奴を君に聞せやうか』『ウン〳〵面白からう、咄し給い』

『エヘン先ね、彼電燈會社の社長は知ての通り雷公だらう』『ウン〳〵』『此社長がさ、或日の事、斯樣毎日下界へ下つて來ながら、下界の有樣を知らぬのも殘念だと云ふので、子供を連て或日の事上野へ出掛たさ、スルト、ホラ、下界が珍しからう、勿論時折ゴロ〳〵轉る拍子に雲間を踏外して落るさうだが、其時は周章て駈上るから、下界なんぞは見ないんさ、何が偖て珍しいだらけなので、博物館から陳列塲を見て、最期に這入たのが動物館だ、所が此處が滑稽さね、子供が君虎の怒りつ吠つするのを見てね』『フヽン何した』『お父さん怖いよ下帶が化てるッ』

（完）

勇しき孝子（三）

松ヶ枝女史

（四）　知事の息子

慘酷な奴隷商人の爲めにフエレブが群衆の中に投げ込まれた時拾ひ上げた人はメカエル、サントと申男でムいました彼は貧窮でカテアの塲末の小さな小屋に住んで居りましたが何の身寄りもない獨り暮らしでムいましたから富貴なトルコ人の子供等に手習、算術、讀書など教ひて辛くも生計の資として居りましたその受くる謝禮と申は至て僅少なものでした故今このフエレブを拾ひ上げて養子と云ふ事は彼に取つては非常な敵身でムいました然かして彼が世の富には至つて不足でムいましたが慈善の心に至ては富んでありました、

彼が奴隷市塲に居りましてフエレブはその兩親の慘酷

な取扱ひを受くるを見ました時に始めて金が欲しいと思ひましたからもし裕富であつたなら自分が金を出してあの憐れな親子に自由を得さして遣るものをと思ひました、フエレブが球の如く空中に投げ上げられた時彼は兩手を伸ばして受け取つて優しく自分の胸に抱きしめ「安心なさい、神は今日あなたを救ふ爲めに此處に私をお遣はしになつたやうです、私はあなたの親のやうになりましよふして私の家はあなたの家と思ひなさい」と親切に語りました、

それから道々優しい言葉をかけながらなだめすかしてフエレブの悲みを癒やそうと色々機嫌を取りながら自分の小さな小屋に携れて行きました、兩親の運命はどう決まつたか見やうとして再び市場の方に歸つて來た時が丁度前回申上げたあの憐れな母との瞬間の對話に間に合ふたので厶いました、

その後兩親の賣られて行つた先はバグダドで主人はマスタフワ、コドセといふ商人だといふことを聞き知りましたからその名を忘れぬやうに意に留めて置きました、悲痛にしほれて小屋に立ち歸つて憐れな小さきフエレブを傷わりました、

フエレブは遂に自分の腕に抱かれたまゝすや〳〵と寢入りましたから母親も及ばぬ親切と誠心もて大切に臥床の上に臥させ熱心に神の冥助のこの子を離れぬやうにと祈りました、親切なメカエル、サントが樣々な手段もてどうぞ慰めやうといたしましてもフエレブの悲みはなか〳〵容易には薄らぎませんでした然し追々時の過ぎるに從つて幾分か紛れるやうになり蒼ざめた顔にも紅みがさして來る眼も再び冷しく輝くといふ躰になりました且つ流石は子供の事とて直きに近所の子供等の中に遊び仲間を得ましたのでメカエルはフエレブが樂しく遊ぶ樣を見て至て喜んで居りましたメカエルはフエレブを小屋に携れ來つた事を決して悔ませんでし

た如何にといふにフエレブは愛と感謝ともてよく老人の親切に酬ひましたから、

彼等は日常の必要品の外何もありませなんだから老人メカエルは生計の爲めに隨分辛らく働かねばなりませんでしたが猶二人とも滿足して幸福でムいました、月日流れてフエレブが十四の年となつた時は養父の手助けに弟子たちに敎へる事などいたしました、是れは午前の仕事で午後には近所の山にかけ登つたり海岸を巡つて貝殼を集めたり或は又買人に賣る爲めに林の中を探がし歩るいて珍らしい木の實を拾ふなどして暮らして居りました、

フエレブは又度々水夫等が荷物の積み下ろしするを助けて幾何の賃錢を受けましたが贏けた金は決して徒らに費やしませんでした、數年の間にはなか／＼大數の金となりましたが然らば彼はその金を何に用ひたのでムいませう？

フエレブは十七歳の春となつてはカンブア中匹敵する好少年は見出されませなんだ誰でも彼を知つて愛しましたが彼は又誰にも優しく親切で氣易くムいました、彼が雙の眼に涙を湛えて悲みに沈んで居る樣のメカエルの眼に映つたこともありましたが何の故かは告げないで何も困つたことはないと計り申しました一日フエレブが山を登つて居ました時遙か森の中で耳をも貫くやうな叫びが聞えて扶けを呼ぶやうに見えました、天性大膽不敵なフエレブは矢庭に大きな木の株を取り上げて武具の代りと手に掉りながら聲した方の森の中にまつしぐらに驅け入りました劍の擊ち合ふ響や鐵砲の音など切りに聞えて居りました見れば森の中には一人の華でやかな貴公子が木の幹を楯に支えながら切りに攻めかゝる三人の惡漢を防いで居る、その傍には早や事斷れたやうな風躰の男が眉間に重傷を負ふて仆れて居ます近き木のもとに鞍置いた二頭の馬の繫であるの

を見れば恐くは貴公子の從者でムいましやうか、

フエレプは直ちにその場の事情を合點しました、危險にも頓着なく青年の傍に身を寄せて持つたる大木の株もで賊の一番强そうな奴を地に叩き付けました「勇氣！勇氣！惡漢を追ひ拂ひましやう」と青年に威勢付けました、青年は喜ばしげに叫びましたがフエレプは已に第二の賊をもうち倒しましたので三番目は何方にか逃げ失せました、

青年等は敢て追擊致しませんでした、救はれた青年はフエレプの下に身を投げて「友とも兄弟とも申やうがありませんあなたは私の命の恩人ですアラと私の父の名に訴ひても決して忘れは致しません、必ず御恩はお酬ひ致しましやう」、

フエレプは笑ふて答ました「自分の義務をしたとて何のお禮が要りましやう、貴君とてこんな場合には矢張り御同樣になさるでしやうや、まあ、それよりはあの負傷者に手當てを致しましやう」

「あゝ不憫な事した、ハツセンは殺されたなあ……」と從者の傍に進みつ青年の申のをフエレプはうち消して「まあ、お待ちなさい、傷は至て深手ですが然し死に至らんかも知れません」

間もなくハツサンの未だ死なざりしとが判りました、彼は眼を開けて微かに申ました「頌むべきかなアラ！あゝ私は今安堵して死なれます」

「否、否、どうぞそうでなく……」とは主人の言葉でムいました、

ハツサンは漸く頭を擡げて「賊は何處に居ります？」

「二人は木の根の處に死んで居るし一人は逃げ失せてしまふた、もう再び來るとはなかろふから案じるな、此れが私を扶けて下さつて恩人だよ」

「頌むべきかなアラ」とハツサンは答ひました「あなたが安全に免かれなすつたことは父君の何よりのお喜び

でしやう、實に恐ろしかつたがそれにしても知事の令息の命を救ふて下さつたは何處のお方でしやう」

フエレブは驚きました「知事の令息！私は憐れなギリシヤ人の孤兒で名はフエレブ、メサロスと申ますと答ひました、

「それじやあなたはギリシヤ人でキリスト教徒ですな、然しお案じなさるな、あなたは善人な上に至て勇敢です、私共はこの後兄弟となりましやう、フエレブ手をお伸べなさい兄弟の約を致しましやう」と貴公子に言はれて、

フエレブは愈々當惑しましたその國の習慣に從つて兩手を胸に横へながら「主君どうして私があなたの……あまり不似合な！」と答ひました、

貴公子は直ちに遮つて「主君などゝ申さるゝな私をばアシユメットとか兄弟とかお呼びなさいよく似合ひますあなたはお自分の命を賭けて私を救ふて下された、まあ私と共に父の處にお出なされ、ハッサンやお前は馬に上るほどの力があるか」

「お主人は擊たれた爲め傷よりも眩暈して仆れたので」とハッサンは答ひました、

「それじや躊躇しないで直き立つとしやう」と言ひながら馬を解き來つてカシユメットはハッサンを鞍に上せました、他の馬にはフエレブを乘せたいと思ひましたがフエレブは固く辭して聞きません强て願ふて轡をとり兼ぬるハッサンの馬を牽き行きましたアシユメットも餘義なくその意に任かして靜かにフエレブの傍に馬上ながら並び行きました、「何處にお導き申ましやう、あなたの父君の御殿は海岸にありますが」

「そうです然かし、この五日はカチアの方に參つて居りました、御存知ないつて不思儀ですねい」

「私は何が世の中に起つて居るか餘り知りません市に行つて世間の事など聞ひて居る時が餘りありませんか

ら、然かしまあどうしてあなたが賊の手にお落ちになつたかお話し下さい」

アシユメツトは笑ひながら「何それお雑作もない直きお話が出來ます、私は獵を好むのでハツサンを携れて森の中に乘つて來ました私共の鐵砲の音が賊の心を惹ひたのか三人の賊が顯はれ來て行きなりハツサンを仆しつけて一同私にかゝつて來ました丁度あなたがお出下さつたので運よく扶りましたなぜまあなたは大預言者（譯者註す、大預言者とはモハメツトのこと）の信徒でなかつたのでしやう、私の父は必ずあなたを保護して充分お酬ひ申ましやうが然かし父は熱心な回々教徒です、フエレブあなたは信仰を變ひねばなりますまい」

「否、決して致しません、キリストを見捨るよりは寧ろ何事でも忍びましやう、アシユメツトもし私が世俗の利慾の爲めに自分の奉ずる宗教を變ずるやうなことをなしたなら必ずあなたは私をお見下げなさるでしやう、」と優しきうちにも充分の決心を含まして答ひました、

「あなたの言は正しいです私はあなたを悪しくは思ひません」とアシユメツトは若き友の手を情こめて握り申ました、

憤怒時の癖

無くて七癖と云へば誰しも癖はある可きながら機嫌を損じたる時は表はす癖にも種々あるこそ可笑けれ英國皇太子殿下は左の眼瞼をいと捷く動かし澳太利の皇帝陛下は口に息を滿して頰を膨らし露國皇帝陛下は頭上に手の掌を加へ土耳其の皇帝陛下は手をもて確と咽喉を扼しグラツドストーン翁は踵に身をもたせ身をぐるりと回轉するの癖ありとぞ

群書解題

方丈記

欲東翁

天竺の昔、佛在世の時に於て、維摩淨明といふ人あり、毘耶離城のほとりに住む、家尤も富み榮へて、大福長者の名四隣に高し、かつてより敎を釋迦にうけて夙とに奥義を極めたり、一丈四方の室を構へて閉ぢ籠り、病と僞はりて外に出でず、其由つたへきゝて見舞ふ人々ひきも切らず、維摩即ち其身の病につけて種々樣々と法を說き、其いづれもを道に入る、是即ち佛法にいふ方便とて、衆生濟度の手段なり。

釋迦も亦其病のことをきゝ、代り見舞はんことを使徒に命ず、いづれも大ひに維摩を恐れて、我こそ行かんと應ずるものなし、されば汝こそ行けと文殊をしゆ、文殊は人々かねて知るべし、知惠の文殊とて限なき使徒の中にて、最第一の賢者なり、此人にして行かんには如何なる維摩にも說破さるゝことあるべからず、と各々かたく思ひしに文殊わけもなく破られたり、玆に於てか今はとて釋迦自身使徒を率ゐて遂に行けり、行きて一場の舌戰、維摩つひに破られたり、其事の顚末綴りなせるもの維摩經とて世に傳ふ、然して其病室を維摩の方丈とはいふなり、今に至りて禪寺の客殿に方丈の稱ある蓋しこれより始まりしならん。

此方丈の病室の面影をうつし、洛外大原の里に獨りたれ籠め、ふかく人世の姿を察して、いよ〳〵世の中の無常を感じ、思ひよるまゝを書きつくねたるもの即ち鴨長明が方丈記なり。

長明は鎌倉時代の人にして、都加茂の宮の禰宜鴨長繼が子なり、幼きより人に優れて聰明英才、長じては禁中に仕へ奉り、覺え日に增していよ〳〵芽出度、昇進一つもあやまたず、應保年中いまだ青年にして從五位に敘せらる、又異數なりといふべし、さるを源平の戰より禁中のゆかり忽ち絕へて官を罷めらる、玆に榮枯盛衰の賴がたきことを悟りて遁世の心を萠せり、されども和歌管絃の道を以て常に後鳥羽院の宮に伺候し、

ひと〳〵に時の再び來りて、世に又出でんことを望み、これに些か思ひを慰さめ、送りむかふる年月につれ、萬づいよ〳〵心と齟齬し、望遂に達すべくもなきに心を決して家を出で、髮を剃りて遁胤と號せり。

上述の如きなるを以て卷中すべて坊主臭し、開卷第一まづ

行水の流れはたえずして、しかも元の水にあらず、流れに浮ぶうたかたはかつ消へ、かつ結びて久しくとゞまることなし、世の中にある人と住家と又此の如し

と、起筆して、中段繰かへし〳〵事の例をあげて無常をかたり、末段おのが出塵の安を語る。

厭世文學とやらいふ名はあれども、文章の妙、和漢折衷の宜しきにかなひ、玲瓏玉の如く一のよどみとてもなし、末段ごとに、然り、苟くも文に志あらんものは何れを置いても第一番に讀まざるべからざるの名文なり。

註釋の書、新しきものは多けれど、古きは割合に少なし、されども亦必ず註釋を要する程の難句も少なし。誠に短かきもの二時間もかゝれば讀了らん。

故舩武女史傳　慈仁博愛の道を盡し且つ小梅牛島學校に功績ある同女史の評傳今度日本橋通三丁目林商店より出づるといふ

近着紹介

田村將軍　日本橋區本町三丁目博文館發行

日本お伽噺第二編として發行す、先づ京都東山なる將軍塚より說き起し田村將軍が勅命を奉じて奧州の賊高磨を討平し、次で伊勢鈴鹿山の鬼を退治し、藤原仲成の亂を平定し、終に正三位兵部卿に累進したる我國歷史上の事實を、例の漣山人が流暢平易の文章を以て叙べたるものなり、附錄にがんがらがんの雁といふ無邪

氣なる寓意譚を添ゆ、年方書

書は善良清潔なる一世界なり、人之を周圍して、血肉活動し、人これを玩戯さして、福祉生長す(ウチーヅウチース)

家　政

數字のなぐさみ

誰か數字は乾燥無味のものであるといふのでせう。統計學者や、經濟學者や、はた數學者などの主張する所は別物としても、數字はさう乾燥無味のものとのみはいへませむ。隨分これによりて品の好い、高尚な娯樂が獲らるゝことのあるものです。

一を三倍すれば三となる。是は明り切つた噺しで、別に不思議もないが、『三』といふ數は、もと〳〵不思儀の結果を生ずる、可笑しな性質をもつて居る數です。』例へば如何な數でも拘ひませむ、333,444,777といふ如く、同一數字を三箇幷列して御覽なさい。必らず殘餘なく、奇麗に『三』で割り切ることが出來ます。

倘も一步を進めて今度は、101010,131313或は416,416,416といへるが如く、如何なる數にても、基數を二字或は三字組に合はせたるものを、三箇幷列して、『三』といふ數で除つて御覽なさい、矢張り同一の結果を獲て、一箇の殘餘も出來ませむ。

是丈では未だ興味が素然でせうが、もし此樣に組み合はせた數字は、如何に其位置を轉換させても、同じく『三』で除却ることが、出來るとしたなら、隨分面白くはありませむか、直接前の例の二と三を採りて、試みに其數字の位置を自由に轉換して、113133, 114661446として御覽なさい。結果は同一、『三』で割りて更に殘餘は見ますまい。

不思議で、面白いのは未だ是ばかりではありませむ。例へば29といふ數字を三百幷列して292929といふ數を

置きませう。此數は『三』で殘餘なく割り切るとの出來るのは、既に申した通りです。不思議の事は、此うして割り切るとの出來る數は、啻に其數字の位置を轉換するばかりでない。先づ其因子とも見るべき29をば、計上して29となし得べき數。即ち14と15とが、‵12, 15及2とか、13,8,7及1とかいへる數字に轉へても、之を計上したる數が肝腎の29より多くも少くもない、畢竟同數なる時には、同じく『三』で殘餘なく割り切るとが出來るといふのです、試みに292929の代りに今分解した141512152213871を置て『三』で割つて御覽なさい。一箇の殘餘も止めませむから。是は獨り29の連續數には限りませむ。如何な數でも同じ事です。不思議も不思議。此うなると數字も萬更乾燥無味のものとばかりはいへますまい。

因子とも見るべき基數の組み合せは、二字に限らず、三字に限らず、四字五字多に幾字に上りても是を三箇並列さする時は同じ結果です。而して三箇並列せしめたるものなる時は、其數字の位置を如何に轉換しても、又其因子の計數を傷けざる以上、如何に其數字を代ふるも、少しも變りはありませむ。なむと妙不思議ではありませむか。

『七』といふ數も、亦妙の數で、餘程是に類似して居るとがあります。即ち六字の同一基數より成立てる數、例へば444444或は555555、若しくは666666の如きものなる時は、必らず殘餘を生ずるとなくして割り切るとが出來ます。若し又數の組み合せが二箇の基數字より成立てるものなる時は、是を三箇連續並列すれば、同じく『七』を以て除去して殘餘を生じませむ。例へば171717÷7＝24531の如し。若し又數の組み合せか一箇を增して、三箇の基數字より成立てる時は、殘餘なく、割り切るには其數を二箇連續並列せねばなりませむ。即ち648648の如し。此くしたる數ならば、如何なる數

にても、亦必らず不思儀に、殘餘なく『七』で割り切れます。更に一歩を進めて、若し又四箇の基數より成立てる數なる時は、其數を并列連續せしむると、三箇ならざれば除却し得ることが出來ませむが、三箇并列連續せしむる時は、必らず割り切ることが出來ます。例へば數が4876といへる如く四箇の基數より組み合せられて居ると志ませう。此三箇の連續并列は487678764876です。試みに『七』にて三を割りて御覽なさい。必らず殘餘は生じませむ。

『七』は未だ『三』程、一定の規則を打ち建つる迄には、研究が十分でありませむが、種々に試驗と經驗とを積みましたらば、一定の規則を建つることが出來ないものでもありますまい。

此他尚『九』といふ數、『五』といふ數なども隨分面白い性質をもつて居る奴です。花札や骨牌を弄ぶ代りに遣の樣な研究をしましたなら、何れ程面白い娯樂となりませうか。又何れ程面白い發見が出來ませうか。而して又何れ程推理力を强め、何れ程頭腦を緻密にするでせうか。隨分長夜の伽としては、測り知られぬ効果が收め得らるゝことでせう。

天然痘の流行

本年も亦府下に天然痘流行す、其性質寧ろ惡性にして生命を殞すもの多かり、時節柄最も用心せざるべからず。

天然痘の感染を豫防するには、最も易き事なり、豫防法とは種痘これなり、されば其筋に於ては嚴重に此蔓延を防かんが爲め種痘を各家に勸告す、たとへ勸告を待たずとも、自己及家族の身体を尊重するものは進んで種痘を行ひ、十分此病毒を豫防せねばならぬことは申すまでもなし。

然るに世間には此豫防法を實行せず、其豫防法の大可

にして緊急の事なるを知ると雖も、優柔不斷、終に愛兒をして天然の美質を損ぜしめ、甚しきは一命を致さしむるに至る、何が故に優柔不斷、以て種痘を緩漫に附するか、種痘手數のかゝることにもあらず、種痘大金を要するにもあらず、たゞ兒童が種痘の經過中は、多少の熱氣を發し食事不良にして、十日間ばかりは大にむづかりやかましきをおつくうがり、成るべく健康の時、成るべく氣候のよき時と次第に緩怠に流れ、いつの間にか不幸の感染に遭遇すること多し、素より兒童病症に罹り居らば種痘を遲延せしむる場合ありと雖も、醫師の許可する場合には斷然種痘せしむべし、氣候などに關して遲疑して緩怠に陷るは甚だ愚の極なり、種痘はたとへ天然痘の病毒に接せし後に於て行ふも、大に其病勢を減ずるなり、

此頃我社員にも兩親の優柔不斷よりして愛兒を天然痘の病毒に感染せしめ目下治療中なり、其兩親の心中を察しやられても氣の毒千萬、寒心すべき事なり。

種痘は、兒童のみに限らず大人もなすべし、何となれば一度種痘したりとて終生其病毒を免るゝにあらず、六七年を經る時は其効力を失ふなるが故に五年若しくは六年目毎に種痘をなすの安全なるに如かず、又免疫期内と雖も、天然痘流行の際は、年限に係はらず種痘を斷行すべし、これ文明人種の義務なり。

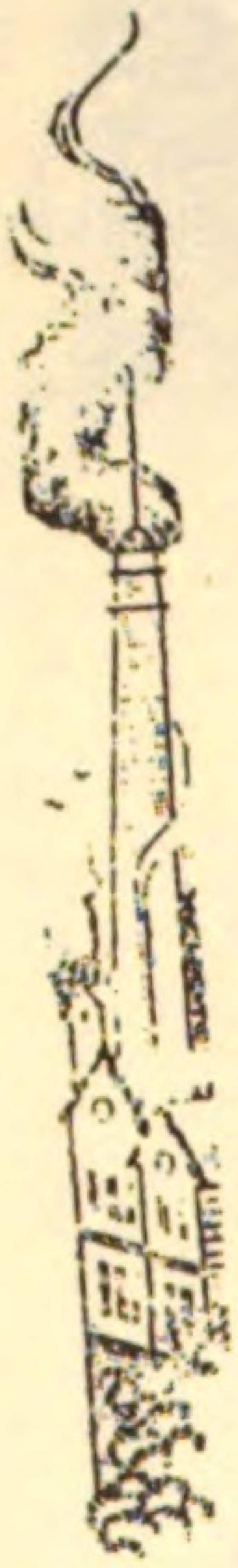
たとへ種痘を爲して十分豫防をすればとて、天然痘病者に接近して其の病毒に觸るゝやうのことあるべからず、天然痘の外に變痘なる病症あり、これも天然痘の病毒を受けて發するものなれば（所謂輕症天然痘）成るべく此病毒を避くるやうにすべし。

こゝにはわざと天然痘の治療法及看護法を記さず、たゞ種痘の斷行を促すのみ。

内職案内

紙箱製造

近來紙箱の需要次第に廣まり菓子箱、海苔箱、石鹼入、巻煙草入、玩具入、其他小間物品唐物品等の入物には皆此の紙箱を用ゐざるなきに至りぬ、從てこれが供給者たる製造所及内職者も亦非常に増加し、製造所の看板は市内各所に之を見るに至れり、此の職はボールと糊とを以て張合し箱の形を造るものなれば前號に紹介したる楠玉簪の如き緻密なる技術を要せず唯だ器械的に數多く製作するものなり、されば一日二日製造所につき見習はゞ誰にても容易に覺ゆべし、賃錢は紙箱の種類により又製造所によりて各相違あれど普通一日に七八錢より十一二錢位迄では得らるべし。



社交一斑

流行の栞

流行子

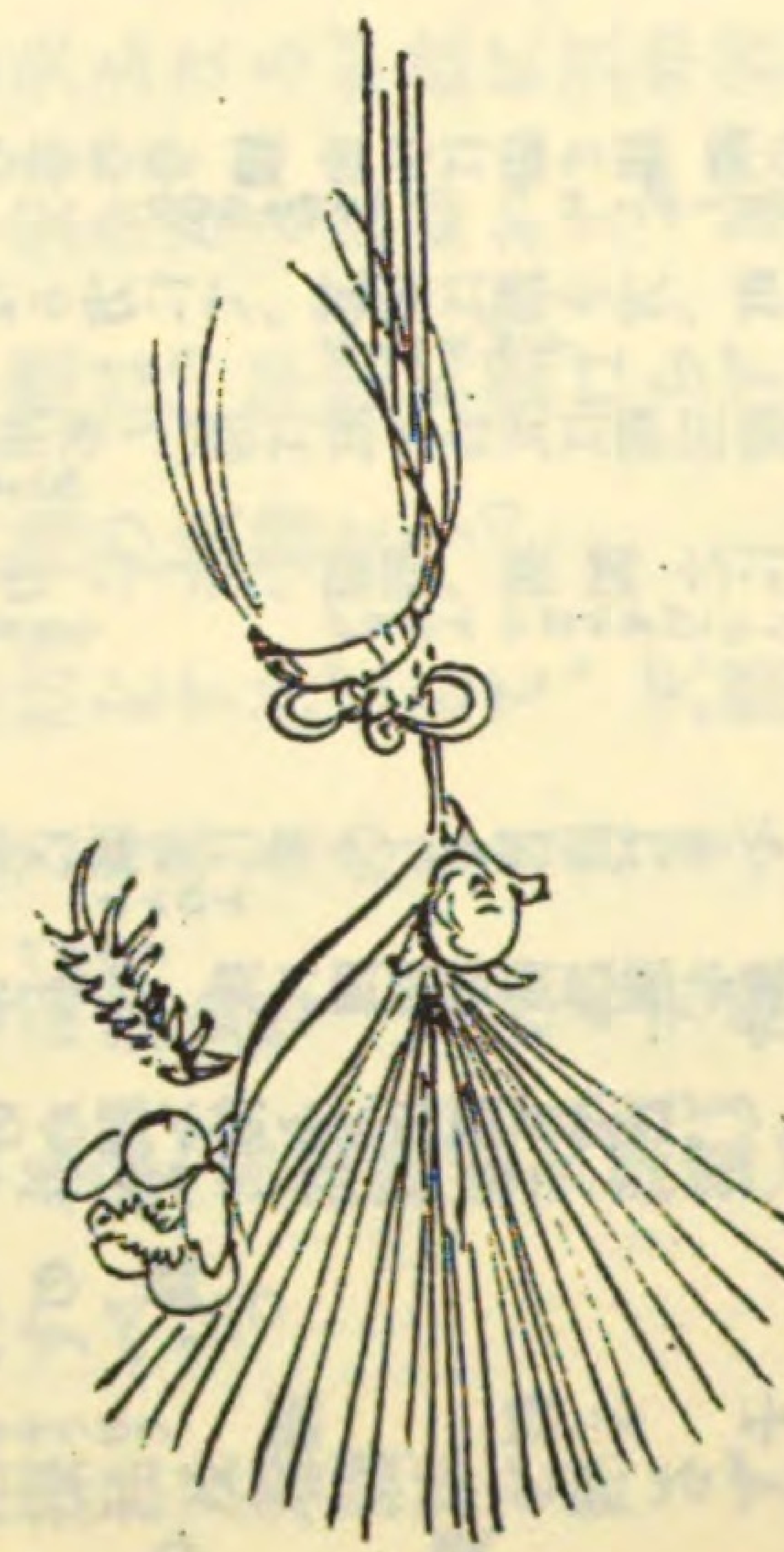
新年の髮の具

年々髮具の進歩著しく眞個に美術の心髓を傳ふるに至りては、これ全く國民の美術心の發達せしによるならんか、殊に西洋美術思想を加味し、殆ど繪畫と優劣なき境に及びぬ、次に新年に珍らしく目出たきものを案内せん

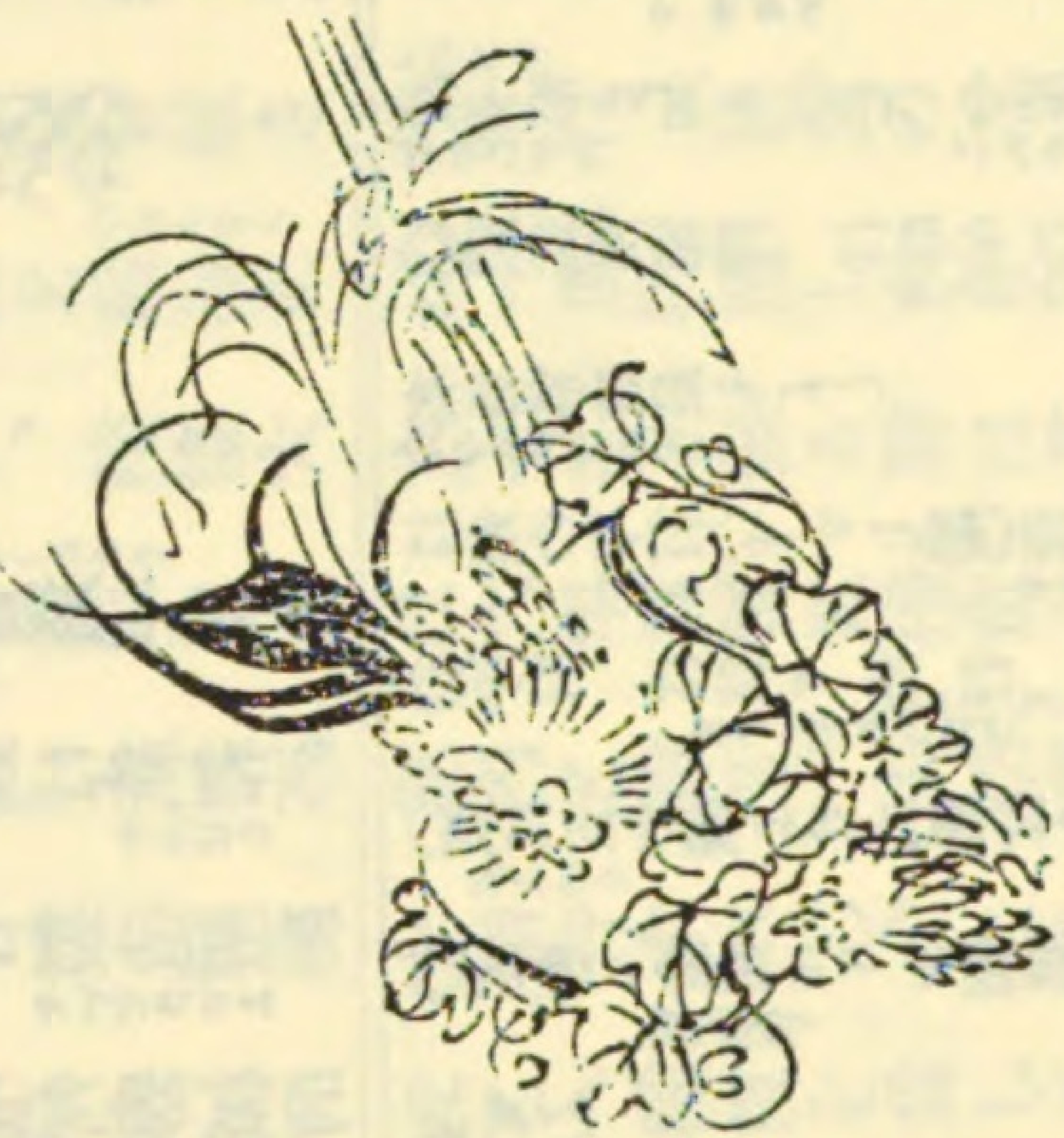
◎花簪　金銀モール製第一等の勢力にして、縮緬、摘製之に亞ぐ、(價は五十錢より二圓位までの所需用多し)房は紅と白又は暈三段染

◎平打　は益々流行、花は大きなる方にて、耳掻は薄き方、町家の娘は銀の平打(すかし彫)流行し、山の手の令孃向には銀と錫、銅の張分、布目象眼最もよし

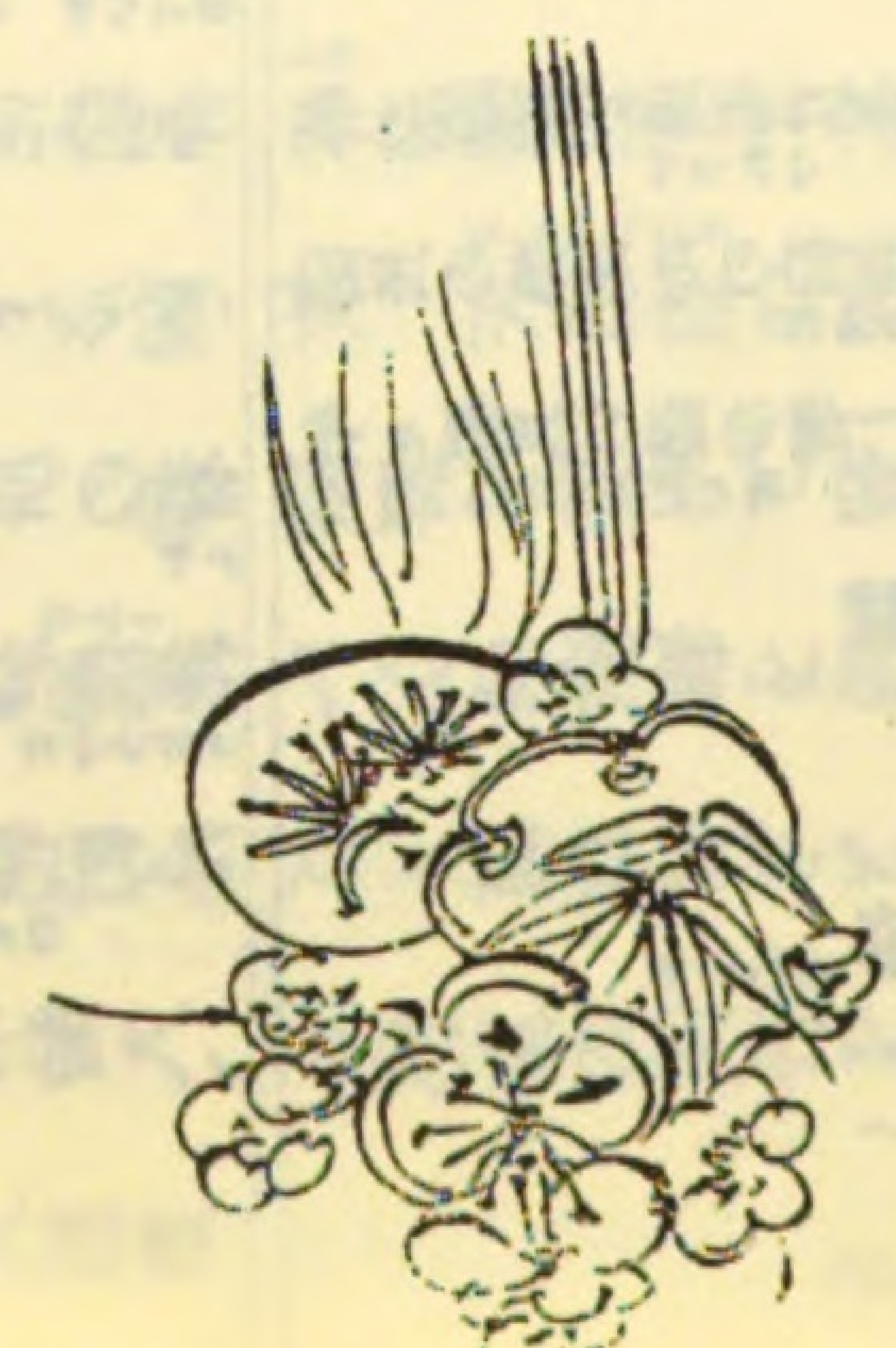
◎禮式用櫛笄　は昨年の通り中京形(無地鼈甲)にして蒔繪、彫刻物は政子形と知るべし、今度尾張町白牡丹本店より新意匠を以て發賣したる櫛笄は、黄揚製に美妙なる彫刻を施せしものなり、人意を迎ふるに相違



新年の花簪



新年の花簪



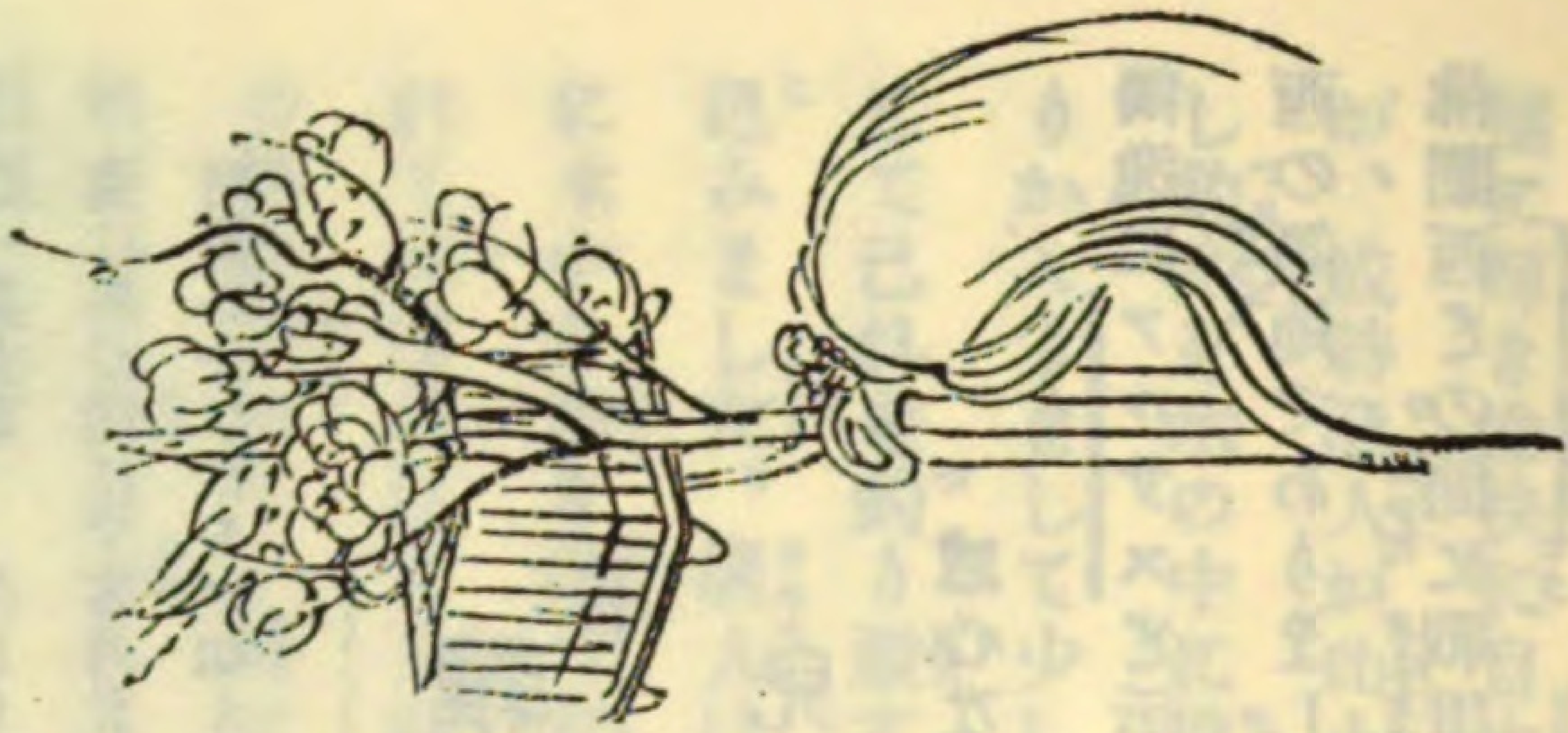
新年の花簪

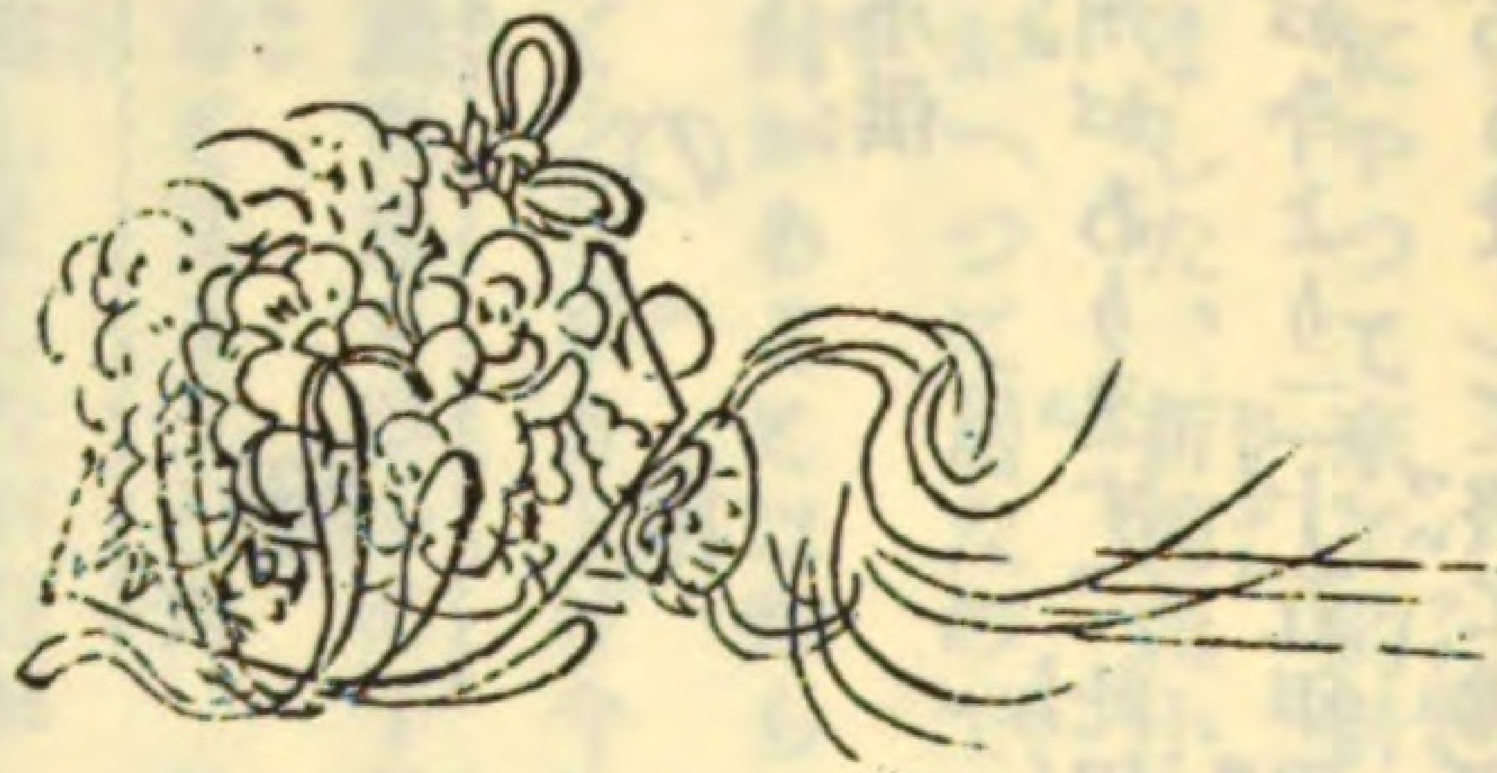


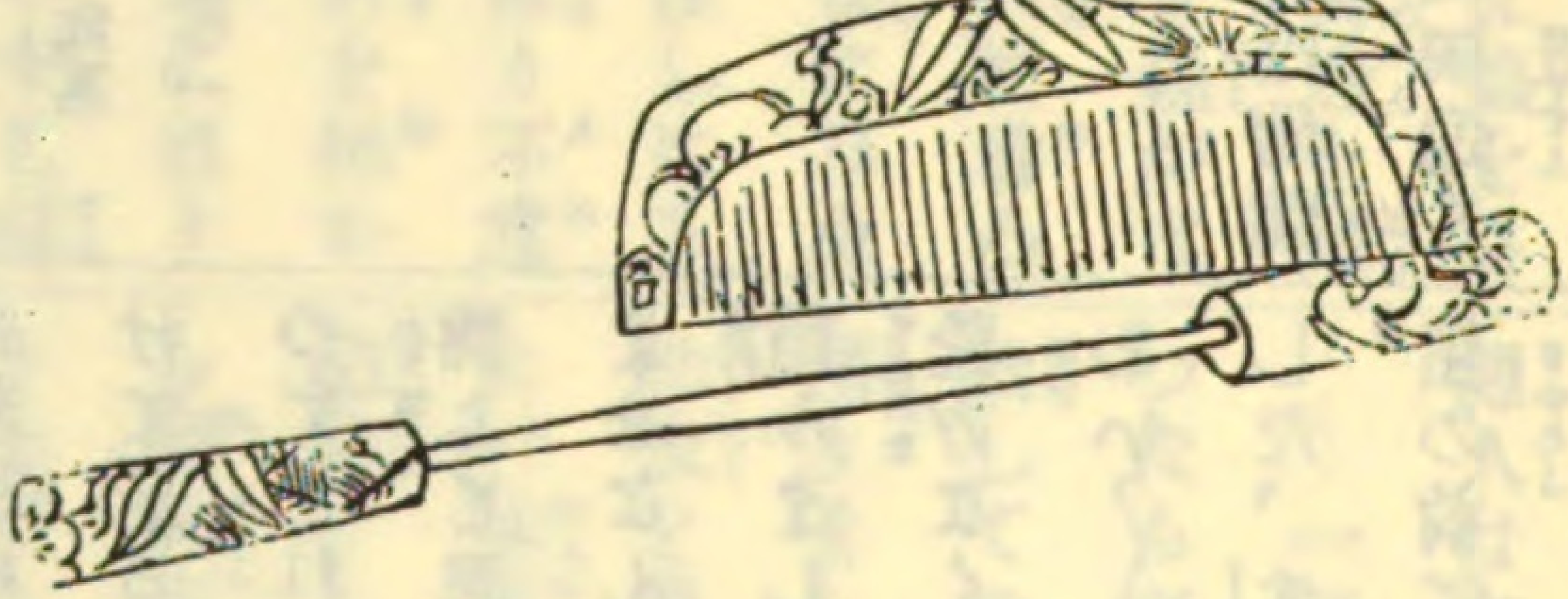
新年の花簪

あるまじ

◎ちよいさし　にはいろ〳〵あれど米の穗に米一粒を置きて一方には米と穗との延喜を見せ、一方には其米粒を鷄卵と見做し、雛が殼を破りて出でんとし、明年の酉の歳を祝するなど着想面白し、よろ昆布に勝栗などの趣向もよし


新年の花簪

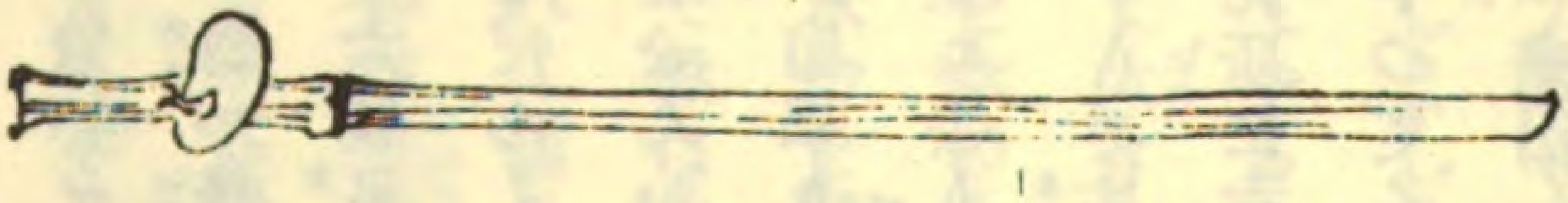

新年の花簪


黄楊製櫛笄


平打簪


ちよいとざじ


ちよいとざし


ちよいとざし

◎一葉女史　久しく肺患に罹りて病床にありし同女史、危篤遂に起つ能はず客月廿三日溘焉逝きぬ吾人は現今の文學界の一明星を失ひたるが如く覺ゆ深く痛惜に堪えず、噫

雜録

小兒の世界

感心なる小供

獨逸にアルサスと云ふ州があります、此州は元は佛蘭西の領地でありましたが今より二十五年程前に獨逸と佛蘭西との間に戰爭がありまして終に佛蘭西の敗軍となりアルサス州はローレンと云ふ州と共に獨逸に取られました、此アルサス州がまだ佛蘭西の領地でありました頃ストラスブルグと云ふ此州での第一の市にオベリンと云ふ小供が居りました、此小供が或時市場に行きました所が一人の貧しい婦人が小さな小供を伴れて古着屋の前に立て其兒に丁度、似合つた着物を買いかけて居るのを見ました、小さい小供は自分の着物を買つてくれる事を知つて大層喜んで居ましたが母が錢を拂ふと思つて錢入を出しましたところが丁度六錢足りませなんだ、そこで古着屋にまけてくれとてだん／＼賴みましたなれど、どうしても一文もまけませんから詮方なく愛らしい小供の喜ぶ着物を買ふ事が出來きずわい／＼泣く小供の手を引いて悄々として立ち去りました、オベリンは之を見て居ましたがつく／＼と古着屋の前に歩み出て申まするには「伯父さん此所に六錢ありますからどうかあの小供に着物を賣てやつてください」と云つて一錢銅貨六個を古着屋の前へ差出して直く走り去りました。

オベリンは成長して後ゑらい牧師となつて多くの人々から神の樣に尊ばれました、此人は物故したが其慈悲深き心と潔き德行は人々が記臆して居ますからアルサ

ス州では誰一人としてオベリンの名を知らぬものは有りません。

正　直　な　る　魚

或る清き小河の流れに一つの小さい魚が住で居ました大層奇麗な魚でありまして其鱗は日光に映して黄金の様に輝き愉快に自由に水の中を泳ぎ廻つて居りましたが、或時漁人が此小河にやつて來て釣針の先に蟲をさし釣糸を水の中に投げました、折節此小魚が其邊を通りかゝりまして少し腹がへつて居たので、旨き蟲がなとて己れを釣り殺す毒針があるとは知らで一口に呑み込みました、漁人は直く之を引き上げ今迄愉快に自由に水中を泳ぎ廻つた奇麗な魚も空中に干乾らぼしにされて死なねばならぬ運命となりました、魚は餘り不意の事に驚いて一時は氣絶しましたが口から釣針を抽かれて今は籠の中に入れられんとする時漸く正氣に返り面白き心地よき水の中ではなく恐ろしき空氣の中に捕へ上げられた事を知りまして恐ろしくて聲が出ませなんだが力一ぱいに細い聲を出して漁人に向つて「今日の所は生命だけ助けてください貴下、今私を御殺戮になつても餘り小さくて何にも御用に立ちますまい若し今生命を御助け下さればもつと大きくなつた時に其時こそは生命を差上げますから」と云て歎願しました、漁人は之を聞て可愛想に思ひ「さらば許してやる…………一年間生命を延してやるから一年立つて大きくなつたら必ず此處にやつて來い」と云つて魚を水の中に放してやりました、魚は喜んで以前の樣に水中を躍り廻りました。かくして丁度滿一年立つた所で魚は先の約束を覺へて居まして正直に漁人が釣を垂れて居る所に、泳で行き漁人に向て申しますには「昨年は生命を御助けくだされまして難有ふ一年の期限がきましたから御約束通り生命を差上げに參りました」とて何時釣り上げられてもかまはない樣に仕度を致しました、漁

人は魚の正直なるに感心して遂に魚を許してやりました、何と正直な魚ではありませんか（寓意談）。

深井仁子

（事實は去十月の報知新聞による）

黄　花

山高く水清き上州高崎にひとりの女丈夫あり。其名は未だ廣く世にきこえねど、其人となり氣象世にすぐれて四十餘年の經歷感ずべくまた學ぶ可き節もいと多かり。女丈夫とは誰ぞ。高崎國振女學校校主として教育に身を委ね靜かに世を送る深井仁子女史是なり。

人物を聞いて先づ問はるゝは其父母なり。仁子女史の父は、天保の初高崎藩主大河内右京亮の馬廻役を勤めし深井四郎資勝とて、度胸ひろく、武藝に達し、俠氣盛んに、家には常に浪士を養ひ、いざといへば一方の將ともなつて働かむずる覺悟ありき。本家の深井仁兵衛は藩の家老なりしが、深く其志を愛で、吾に子供あれども彼には及びがたし、分家には惜しき人物よと人にも語りぬ。程なく仁兵衛死して其子友之助の代となり、かねぐ\分家の四郎に快よからず思ひ居りしことゝて、權にまかせてさまぐ\に四郎を窘めけれども、四郎は物ともせずして居たり。妻りの子も男勝りの氣丈者なれば、夫を慰め苦を分ち中睦しく暮す内、ろく子くめ子の二女生れしが、ろく子七歳の頃四郎はかりそめのいたつきより次第に枕も上らぬ重病となりぬ。折しもりの子は妊娠中なりしかば、其心づかひ一方ならず、あわれ臨月をのばしたまへと神佛に祈願し、百方心をくだきて夫の介抱に怠りなかりしも、終に其詮なく四郎は世を去り、三月にして仁子生れぬ。時にりの子は二十六歳なりき。

本家の友之助は吾敵四郎の訃音をきゝて大に喜びしが、なほ妻女の殘れるを安からず思ひ、言葉巧みにり

の子に再縁を勸むれど、りの子は亡夫のあとを推し立んと固辭して聽かず。此上は困しめて心を移させんと友之助は祿を剝ぎ、召使を引上げ、母子四人に日に五合づゝの白米をのみ與へぬ。夫は逝きぬ。親戚のものも友之助の威權に懼れて、誰一人音づるゝものなし。さ廣き屋敷に寡婦は三人の孤兒と淋しく日を送りぬ。されど雄々しき氣象のりの子なれば、少しも屈せず、家事のかたわら人の針仕事をなして夜を明すこともしば〳〵なり。りの子また讀書を好み、暇をぬすみて身の爲になる可き書籍に目をさらし心を用ゐて子女を育てしかば、三人の女皆よく生ひ立ちてやさしく母に事へぬ。仁子女史幼き頃祭禮などにゆき玩具屋の前を通る時は、母の心をいためまじと何時も眼を閉ぢて通りしといふ。甚しき貧苦の中なれば、母子共に木綿着物にて食事とても麥飯と香物にて十年一日の如く暮しぬ。かゝる貧苦のうちにもりの子は亡夫の武具書類は固くおさめて、書を講じ武術を教へければ、三人の女皆柔術擊劍薙刀より和歌の道にも通じぬ。仁子幼かりし頃雪の降りけるに、

初雪や寒さは心に叶ふまじ　見ゆるけしきはよしの山かな

と詠みぬ。是れ仁子六歳の時なりとかや。母刀自の心盡も思はるゝなり。誠に母刀自りの子の子供の育て方に心を用ゐしは非常なるものにて、女の胎中にありし間は好む小說も手にだも觸れざりしといふ。りの子また頓智に富み、其日記には友之助に困められし十二年間を前九年後三年の戰など認めありしと。斯る母ありてこそ、仁子女史あるなれ。

仁子幼かりつる頃は、極めて活潑にて、好みて男兒と軍戲をなし、常に大將となりて戰ひぬ。又熊といふ猛犬を愛し、家にあれば其背に跨り双の耳を手綱として座敷をかけ廻りければ、母刀自「坊は犬塚信乃だよ」

など戲むれられぬ。或時町奉行の宅にて擊劍の仕合あり。女史も行きぬ。例の從者も附添ひ行き瞬もせず女史を守りて控へ居りしが、頓て相手の竹刀一度女史の面にあたるや熊は飛びかゝつて相手の足に嚙みつきぬ。これより人々仁子殿にはよき御家來をもたるゝよといひて立合ふものなきやうになりぬ。斯る猛犬なりければ、人に憎まれ毒をのまされて、さる邸內に行倒れけり。女史きゝて馳けつけし時、前足をたてんとして其儘死しぬ。女史いたく悲みて、

かくはかり憂目をわれに見せんとて
深くもわれになれやしにけむ

女史は右の如く活潑にして柔術擊劍など學びしにもかかはらず、よく母刀自に事へ姉上に從ひ、十二三歲より家事を手傳ひ、夜は母刀自の肩をなで腰をさすり、眠り入り給へばいろ／＼夜仕事をなし、十二時よりは讀書し夜の明るも知らざりし事度々なりといふ。殊に家貧しかりければ吾夜仕事の賃金の餘分もて古本屋より國史漢書など借り、字引を賴りに勉學し、終には字引中一字の不知文字なきに至りぬ。かくなる迄にも、當時は女子の學問は片腹痛く思ふ世なれば、生意氣なりとて人々に嫌はれ、內の困難、外の障礙、いろ／＼ある中に、女史が學問に勵む心はさらに撓むことなかりき。

高崎藩は從來佐幕黨の巢窟なりけるが、仁子女史は己れの境涯より延いて深く王室の衰を悲み、國史に通ずるに及びて其念いよ／＼深く、朝夕神佛に王室の興隆を祈願せしといふ。女史十三歲の時米艦下田に來り、世の中次第にさわがしうなりけれども、幕府の役人共は一日の安きを希ひて不知顏なるを女史頻りに齒がゆく思ひ

よしあしも知らで隅田の川波に
遊ぶ鷗の世はやすげなる

と嘲りしを、藩中の佐幕黨聞きつけていたく憎みける。折しも國學の師にて富岡藤九郎といふ人女史の歌を傳へきゝていとたのもしく思ひ、女史を招きて日々敎えければ女史は好む道とてます／＼進みぬ。或日女史親戚の家に行きしに、恰も藩の若人達打集ひて七夕の詩會を催せる處にて、人々女史に向ひ、御身は歌よみ給ふことなるが詩會の席に詩なきは片腹痛しといふ。女史負けぬ氣になり、然らば御身達歌よみ給へ妾詩作らむと答ふるに、人々そは興ありとて七夕の別といふ題を出しぬ。やがて女史

施筵曉望水心亭、雨後草萊似數星、
天上遙知離別恨、女手涙露滿階庭、

うたゝねの端居の袖の露ふかし
　別れやちかき星合のそら

と書て出しければ人々顔見合はせて言葉なかりき。女史歸りて右の次第を母刀自に語られけるに、母刀自きびしく叱りて、和歌さへ人に勝れざるに何とてかゝる淺墓なる振舞をなしつる、詩は知り侍らずと答へたりとて少しも恥づるに及ばず、此後は決してかゝる負けぬ氣を出すべからずとさとされけり。これより女史多く詩作りしかど、人には秘して示さざりき。其後獨學勉勵して二三年を過ぎしが、世の中ます／＼さわぎ立ちて鎖港攘夷の議論盛なるに、兎角幕府の因循なるを女史打嘆き、

神風や伊勢の濱をきをりしきて
　夢にも見ばや船かへす世を

と口吟みしを又もや人にきこえいろ／＼の疑をうけぬ。されど上州の皇學者に其人ありと知られたる新井守村翁の如きは、深く女史を識りぬ。斯りし程に深井家の三女年長けて、長女ろく子は婿を迎へ、次女くめ子は天野某に嫁し、仁子女史は家に殘り母に代りて家政をとれり。

慶應の初年なりき女史の親戚宮部某同志を語らひ藩主の弟高之丞を擁し勤王主義をとらんとしたりしに、事露はれて、宮部は寺に幽せられ、其宅には藩士交番して出入の者を詮議しければ、親しき間柄の者も更に近づかざりしが、女史は少しも頓着せずしば〳〵ゆきてなくさめける。折から人の噂さに、明日は江戸より役人出張して宮部以下無罪となるべければ藩にては今夜中に毒殺するか詰腹切らすか危しとの事に、家内親族談合すれど思案も出でず、其内獄中よりも宮部の訣別の書來り、皆々青くなりて嘆息の外なし。仁子女史は如何にもして救ひたしと思へど、手は紙許されず、但食物は送りて差支なければ、忽ち一策を思ひつき、羊羹二つに切り、紙切に「見渡せば水上霞む水無川」と歌の上句を細字もて認め間にはさみ繼合せて差入しが、無事に宮部の許に屆きぬ。宮部は一旦覺悟を定めしも、此歌を見て「夕べは秋と何思ひけん」の下句を察し藩より矢の如き切腹のすゝめありしも、一切取りあはず、翌日果してゆるされぬ。其頃女史夜ふけて宮部方より歸るに、町の廻り角にて、曲者二人顯はれいで矢庭に女史を捉へて側の堀に投入れんとす。女史懐劍引抜き後ざまにつきたつれば、曲者驚きて手放す折しも、提灯の光見えけるに曲者はあわてゝ逃けたりしとぞ。

慶應年中、女史の一家召されて江戸小石川の藩邸に住みぬ。藩の重役に淺井左衛門とて毋方の婿なるが、一日女史を人なき部屋に招きて、今日は御身に糺したき儀あり、當今天下は勤王佐幕の二派に分れ、各必死に相爭ふ、我藩は固より佐幕を旨とすれば、苟も勤王の心ある者は、親戚なりとて女子なりとて即刻牢屋に打込むべし、如何に〳〵と詰問す。女史ほゝゑみて、こは重役の御言葉とも覺えず、貴所は大河内家の門閥しかも執權の席さへ占め給ふ、何とて正道につかせ給は

ざる、只今命を失ふとも苦しからず、抑も幕府は天皇の政を預り奉りしのみ、朝政は决して臣下の私すべきものにあらず、藩主をすゝめ申して勤王の主義を執り給ふてこそ朝廷に忠關東に義なれと重盛の詞をひき、誠を盡して答ふれば。吉左衛門ニッコと笑ひ、さあらんとは思ひたれども、わざと御身の心を試したるなり、吾も同心なれど藩主はなほ若くおはし母公を初め奥女中皆大義を知るものなし御身奥に御奉公申して少しつつ幼き方々を始め人々の勤王心を養ひ給はゝ吾は藩主を始め家中のものの心を堅めんと、思ひ入りて賴みぬ。女史も母の許を離るゝは心ならねど、國のためと、快よく諾ひたり。時に參勤の事已みて諸侯皆歸國し、大河内家も高崎城に歸られければ、女史も伴して歸りぬ。當時藩主漸く十五歳、後室政を行はる。二の姫は殿と同じく後室の腹なれども、一の姫三、四の姫は中臈袖浦の出なり。女史は一の姫の御側頭にて日々怠らず勤めらる。女史は如何にもして勤王の心を導かんと同じ御殿に在す他の姫達にも古今忠臣義士の物語を分り易うおもしろうしけるに、姫達いたくよろこび給ひ、夜は必ず女史を圍みて昔話してよといたく女史を慕はれぬ。後室の御氣入に奥女中の某といふ者あり。老女中臈以下皆々此者に諂ふに、仁子女史のみは少しも憚る色なきを忌み、仁子お姫君の御機嫌をとるは全く吾地位を奪ふ下心ならんと邪推し何とかして逐ひ斥けんと思へど女史は大河内家の連姻といひ、重役の世話にて入りしものなれば罪なくて斥くる事もならず、いろいろ思案の後女史の局に來り今二の姫の浴衣を縫ひ掛けしに御用なれば一寸絎け給ひねと賴みければ、女史は直ちに絎けやりぬ。やがて後室の御召とのことにて急ぎ出でしに、後室方々の前に件の女中女史をにらめて、御身は誠に恐ろしき人なり、已れのお附の姫ならずとて絎けたる浴衣に針を入れおくとは腹黒きにも程

こそあれ。いつも姫達にいや忠臣の義士のと話さるゝくせに、不斷の仕打が思ひやられます、表沙汰にせねばすまされませぬといふ。女史あまりの事に言葉もなかりしが、やゝありて容をあらため、いとほしき姫君にいかで心ありて疵附けまゐらせん、先程細けし時までなかりし針の不意に入りしは不思儀なりと、爭ふ程に、一の姫の生母中﨟袖浦來り此女中に伺ひ、さきほどお目にかゝりし時襟に針を挿されしが、別に局にもお歸りなきに其針如何あそばされしやといひければ流石の女もはたとつまりて赤面なしぬ。是より其女ます〳〵女史を憎み、或夕菓子皿に鮨を盛り、これは姫君より深井殿へ下さるとの御意なればいたゞかれよとすゝむ。女史何心なく、いたゞきて局にかへりぬ。間もなく腹痛はげしく、さては毒なりしよと氣づくにも苦しさたとへん方なく、このまゝたをれんは口惜しと齒を喰ひしばりてありしが、不斗奉公に出づる時母刀自の賜はりし解毒の藥を心づき、探り出して服されければ、次第に苦痛もやみ、一命をたすかりぬ。女史の氣丈なる、其翌日もおして出仕しぬといふ。斯くて女史は妬を受くる事益甚しく、母刀自よりも御暇願へといひおこせしかば、遂に家に歸り厚く母刀自に事へ兒女の敎育に力を盡しぬ。已にして王政維新の年となり、女史は母刀自と共に多年の眉を開きて盛時に逢ふを喜ばれぬ。明治十一年母刀自世を去られければ女史のなげき一方ならず、我爲になれる浮世か、身ひとつに迫る浮世か、現身の世は常なしと兼てより、聞きしが如く古しへもかくや有けん、そこ思へば悲しきかも、此所もへばつらきかも、父の實の父の命は世を早く隱れ給ひて、在し世の影をも知らず形身にと殘す撫子、母そばの母の命の生ふしたて養ひ立てゝ行末の花をも見んと身を盡し、心盡しは難波潟何に譬へん或時は眞らぬ人の横樣に思ひ謀りて此家を、奪はん物と巧まえ

る事もありしを平らかに治めましゝも、母君のみさをなりけり、様々のうきもつらきも苦し共思ひ給はず、夏はしも照日に黒み冬はしも霜を踏みつゝ子等が爲め寒さを忍び、家の爲め照日を凌ぎ蠶飼する時し來ぬれば新桑を取もてはやし養へる母の飼ふこのまゆ作る頃にしなれば、他し人妻にや持たん嫁ぎなば家を離りて親ならぬ親をも持たば、吾いづく生の親には如何様に仕へまつらん、海津見の深き恵みを寄る浪の千重の一重も返すべき由のあらぬば、よしや世の人こそ譏しれよしや世の人こそ笑へ我年の定過ぬとも、側去らず傍ら去らず仕へんと思ふ心を垂乳根の母も哀れと假初に、外に出ぬれば出しより歸るを待せ、家にをれば邊り放たず睦まかに物語らひて、御心をやらせ給へば手弱女の女子なれど、名をも擧げ家をも興し朝夕に御心易く海山の物をまたして百歳も千歳もかくて庭松の枝つく迄も仕へんと思ひし物を、夏の日の暑しくなりて只管に枕も擧げず此の日頃物もきこさず、漸々に弱り給へば、天地の神に祈れど現身の世の習はしは遁れえぬ物にしあれや、しまらくもよけくはなしに玉の緒の絶ましぬれば、言ん術詮術しらに果敢なくも殘る遺物を見る毎に涙ぞ溢る、寢る毎に夜の目合はず玉床に獨起臥徒らに、音のみし泣ゆ親にして

よろこべる親も亡き世に今よりは
誰が爲めにかは身をもたてなむ

子の爲めと實のなり物を植置きし
草木を見るもなみだなりけり

と詠まれけり。

女史畢生の事業は實に教育にあり。三十年一日の如し明治の初め女史は家塾を開き、百名ばかりの女子を敎育せられけるが、塾を出でし生徒皆女德を脩めて評判よかりき明治十一年國振女學校を起し、十五年近隣の父兄の歎願にて發育小學校を設け、實用に適するやう

心して敎育しぬ。廿二年の頃政府より規則の事をやかましく干渉しければ女史は閉校せんとせしも生徒の懇願にて閉校は思ひやみぬ。實に女史の人を導く或時は恐ろしきまでに戒め懲らさるゝも、或時はまた涙をながして憐まれければ皆其德に服せざるものなし。殊に高崎町には小學校少なし貧民多かりければ、女史は節儉を旨とし綿服をつけ、粗食し自ら水仕事もして其費用を校費にあて貧民を無月謝にて敎授しぬ。廿一年の頃上毛婦人敎育會の幹事長に推撰せられ會務を整理し、また安仲前橋あたりに巡回して演説を試みられし事もあり。其頃子弟二三人と前橋より歸るさ乘合馬車に乘られけるに、馬車車夫の仲悪しき折とて、五十餘名の悪車夫出刃をふりかざし追つかけ來るを蝙蝠傘にて打懲されし事ありき。また磯部の温泉にて或高等官の其官威をかりて我儘の振舞ありしをいたく挫きし事もあり。事を好むにも似たれど女史の義に勇み俗を悪み、物に動せぬ事右の如し。

斯くて廿四年に至り婦人敎育會幹事長を辭し專ら女子敎育に身を委ね、人望實に盛なり。此頃公立女學校を興し、女史を校主として縣下の女子を依頼せんと計りしものありしも規則の束縛をきらひて辭しぬ。折しも新任の知事女史に中學師範敎授の免狀はあれども小學敎員には適せず速かに廢校させよと命じけるに、縣官の一人進み出で仁子女史は縣下の敎育に大功ある人物にて、目下女史あるが爲めに町役場の保護によらずして就學するの兒女三百に下らず、さる仰出でなば普通敎育の上大に不都合あるべしといひければ、知事も驚きあらためて免狀を下附し町會より年に百圓餘を出す事に定められぬ。今年の夏酷暑たへ難きに縣下一圓非常に赤痢の流行せし程の事なりき、國振學校の眞向に陸軍舍營の建増ありとて石材木をつみゆく荷車絶えず、やく如き炎天に汗をながし塵にまみれて「おゝあ

つや、かくては燒死もやせんいつそのこと河水なりとも呑まん赤痢病みたりとて何構ふ可き」と息もきれぎれにかこちゆく車夫の言葉を女史もれきゝて、あはれ富貴の人々は涼しき家に住みながらも尙伊香保箱根鎌倉などに暑ささくるに、同じ人に生れて此暑さにかゝる勞働する人こそはかなけれど、女史はそれより姪の大子新井守村翁の遺子增子の二人をさしづして學びのひま〳〵に幾度となく大釜にて湯をわかし手桶にくみて、茶碗千杓をとりそろへ「湯さましの水飲みてよしと門前に出されければ、人々蘇生の思ひし忝なしありがたしといたくよろこぶを女史はこよなきたのしみとせられぬ。

汗あえて御國に盡くせ汲めど〳〵
これの泉のあらん限りは

と紙に認め結びつけおきしを其翌朝誰やらん鉛筆もて左の歌を記しありき。

果しなき泉の水の惠みには
道ゆく人の袖ぬらしつゝ
先いそぐ旅にしなくはかく計り
深きみかけにやすらはましを

歌苑

勇士（譯英文）

三木秀紅

西の方より立ちいでゝ、
若きをのこぞ來りける、
のりたる馬は國中に、
ならぶものなき名馬にて、
とりはく太刀の其外は、
身にまとひたる武器もなく、
よろいもつけず只ひとり、
こゝろ靜かにのりゆけり。
さばかり戀にやさしくて、
戰にもまたいさましゝ、

此の若者の如くなる、
　ものゝふは又あらざりき。
わらび生の野やいはほ道、
　ものともせずに過ぎ行きて、
　あさき瀬もなきエスク川、
　　これさへ泳ぎて渡りけり、
されどかくして若ものが、
　ネザービーなる門前に、
いたりし時は早おそし、
　二世とちぎりし少女子は、
戀につれなく戰にも、
　いと卑怯なるあだし男と、
共に結ばん鴛鴦のゆめ、
　今夜よりとぞなりにける。
少しもおそれず若者は、
　かひぞへ人や家の子や、
　はらからや又他人(よそびと)の、
　　つどへる中に入りゆきぬ、
せなるをのこはいとよはく、
　只一ことをえ言はねば、

少女の父は立ち上り、
　刀のつかに手をかけて、
『おゝ若者よ今こゝに、
　きしは平和かあらそひか、
あるは吾等がことほぎの、
　さちをいはひて舞んとか』。
『君がやさしき乙女子を、
　われは久しくこひたりき、
されども君はゆるさずて、
　ソールウェーの波のごと、
みなぎりたりし吾が戀も、
　潮のごとくひきさりぬ、
吾はむかしの戀人と、
　ひとさしまひつ祝ざけ、
のまんとてこそ來りたれ。
　まことスコットランドには、
なほらふたけき少女子の、
　われにこひするもの多し』。
少女がさせし杯を、

ものゝふは手にとり上げて、
只一いきにのみ干しつ、
やがてかたへになげ捨てぬ、
少女はふして面わかめ、
おほいでおゝとなげきけり、
口邊にゑみをうかべつゝ、
眼には涙をたゝへたり。
はゝのとゞむるひまもなく、
乙女のやはき手をとりて、
いざや一さしまはなんと、
をのこは輕くうながしぬ。
をのこの樣のけだかさと、
少女のかほのうるはしさ、
かつてざしきをかざりたる、
かゝるたのしき舞やある、
されども母は怒りたり、
父はいみじういきまけり、
せなるをのこはかんむりを、
打ちふるひつゝ立ち上れり、
かひぞひ人はひそ〲と、
『われ等がはしきいとこをば、

このわからどに許すこそ、
いとゞまされ』とさゝやきぬ。
乙女の手をばそと取りて、
耳に一ことさゝやくや、
いなや二人はかけいでぬ、
かたへに立てる其馬の、
鞍のうしろにいと輕く、
あてなる女をだきあげて、
女の前にいと輕く、
わかきをのこは飛乘れり、
『少女も今はわがものぞ、
堤くさむら坂ぢをも、
われらはこへてのりゆかん、
かれらはつゞく馬やもつ』。
チザービーなる一族の、
中に多くの人々は、
皆そのこまに打ちのりて、
二人のあとを追ひゆけり、
キヤンノビーリーの野の中を、
走りつをひつ行きしかど、

失ひたりし少女をば、
みしものとては無りけり、
此の若者のごとくなる、
戀に雄々しく戰にも、
かくいましき情郎を、
かつて聞きたる事ありや。

利根舟遊の歌

新井洸

其の一

筑波の峯も影薄く。空さへ匂ふ夕景色。
詠めもあかぬ利根の淵。乘り出る身こそ樂しけれ。

其の二

清き流れに棹止めて。波に任せし舟の沖。
見る眼も分かぬ夕月夜。鷺かあらぬか白帆影。

其の三

風と波とに送られて、憂きを忘るゝ船の中。
晝の暑さもいつしかに。あとかたなくぞ消へにける。

其の四

舟歌絶へし利根川の。波も紋なす水の面。
照りそふ月に興添へて。傾くまでに遊ぶなり。



春期大附錄

第九十三號

(卅年一月十日發行)

新年初刊よりは更に層倍の改良を施し以て一新面目を發揮すべし、而して春期大附錄には

漁師の娘……蘆花生
錦魚の盞……二十三階堂
未定……無名氏
おなみ……春夢

○小兒○はよく肥へて笑ひ顏の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり◎此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虛弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虛弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふることと實に驚くべし◎◎◎此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虛弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の說明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田濟右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

（明治廿五年三月九日遞信省認可）
（明治廿九年十二月十日發兌）
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行